
あおいと仲間たち

大蚊里伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あおいと仲間たち

【Zコード】

Z5210V

【作者名】

大蚊里伊織

【あらすじ】

あおいと、その仲間たちは、妖怪や鬼を退治していた。ある日、鬼が現れる。作られた鬼をたいじするため、あおいたちは戦う。

第一部（前書き）

一年前に作った、あひるあらがある作品ですが、よろしければ読んでください。

第一部

小高い丘に緑に囲まれた寺がひとつあった。

女が簾であたりを掃いていた。彼女の顔は髪の毛で上半分はおおわれていて表情は見えない。

ふいに顔をあげた。

「おはようございます。あおこさん、今日も補習ですか」

「おはようございます。うん」

髪の短い、分厚い眼鏡をかけたブレザー姿の中学生が答えた。
徒步通学らしく、かばんをかかえて坂を下つていく。簾をもつた女はその背中を見送る。

それから三十分後、また一人、今度は学生服姿の少年が走り出る。
さつきの女はもういない。

「遅刻だ」

走つていく。

寺は静かにたたずんでいた。

「お茶が入りました」

先刻の女が、お茶をいれている。
うん。とかああとか言いながら、住職らしき男が飲む。
年の頃は50代くらいだろうか。髪はある。坊主にする宗派ではないようだ。

「たくやはもう行ったか」

「はい、先ほど走つて行かれました。三限目から授業があるので私もそろそろ出ます」

「おひ、そうか、レイン」

「はい」

「帰ってきたら札を数枚頼む」「はい」

「あとケイ君にも仕事を頼みたい」「ちょうど今日明日は休みですが

「どうか、悪いが」「いいですよたぶん」

レインは笑つた。

最初から、あおいには呼び捨てで名前を呼ばせていた。たくや。じ。あおいのことを、たくやは苦手だったが、嫌いといつほどでもなかつた。

それはたくやとあおいが13歳の時のことだ。

辺りが静寂に包まれていた。一人の少女が立っていた。あおいだつた。

彼女は矛を持ち、立っていた。
その視線の先に怪物がいた。
場所は寺の敷地内。

「あおい」

「たくやは叫んだ。

「たくやは結界から出ないで」

あおいと呼ばれた少女がさけぶ。いつもの眼鏡をしていないあおいは、きれいなかおだちをしていた。

百年にひとり出るかでないかの、退魔の能力を持つ天才、という

のがあおいだつた。

孤児院からたくやの父親に引き取られ、ひきとられた時もいわくつきだつた。

歩くそばから浄化する能力を發揮して、靈を消してしまつのだ。もちろんすぐに消耗してしまう。それでは生きていけないと、たくやの父親が、眼鏡に封印能力をつけてかけさせた。

たくやには、幽靈をたまに見る程度の能力しかなかつた。そのことを考へるとたくやはあおいに氣後れしていたのだったが。

その時、たくやは、あおいのことを何にもわかつていなかつたのだ。

そう氣付かされたのは後のことで。

守られてるだけではだめだ。

そう思つたら、口から呪文が流れだしていた。

あおいが来る前から、父親にさんざん言われて覚えたものだ。たくやは結界から出た。風がふいてくる。一心に唱えた。自分の周りに淡い光が集まつてくる。

大きな波動がたくやを襲う。その瞬間呪文が完成した。

たくやは怪物を見た。人が何人もくつついでいる化け物だった。もとは人間だつたのかも知れない。

淡い光がたくやの手の中で強烈な光に変わる。両手を前に出して、波動を受け止めた。相殺され、消えていく。

「たくや」

「大丈夫だ」

あおいの声に答える。

あおいは何のために戦つのか。たくやにはわかつていなかつたのだ。

彼女が今のお母さんをどれだけ大事に思つてゐるかを。

呪文があおいの口から流れ出る。たくやも同じ呪文を唱え始める。

呪文は共鳴を起こし、妖を直撃する。

グルルルルル。

怪物は唸る。

(もう少しだ)

たくやがまた違う呪文を唱えはじめる。両手を前にかざし、怪物の動きを止めた。

あおいが矛をかまえ、走り出す。

矛が突き刺さった。光が爆発し、怪物が白く光るとばらばらになつて消えていった。

「たくや」

あおいがたくやに抱きつく。泣かれてたくやは困る。ぎこちなく抱きしめ返した。

「よかつた」

小さく肩がふるえている。あおいは初めて大きなあやかしと対峙したのだ。怖かつたらしい。

いつも冷静な彼女の別の側面を見た気がしてたくやはふいに自分がずっとあおいを好きだったんだと思った。

自分の気持ちに素直になれずにきたけれど。

「あおい。俺、お前の力になれるように頑張るから」

「うん」

「ひとりで背負うな」

たくやは言った。実力ではあおいに勝てないだろう。それでも力になることはできるはずだ。強くなりたい。たくやは心底そう思つた。

それが、最初の話。

あおいもたくやも部活はやっていない。

早く帰ってきて宿題をすませる。

レインの作った料理を食べ終わって、本堂に全員が集まる。

札が本堂の四隅に張られている。

「夕方から刀の鍛練を行つ

妖刀を作るのだ。

「百鬼夜行が来るよう道を作つた」

全員氣をしめてかかるよ。とたくやの父、しのぶは言つ。

たくやにはひと振りの刀が渡された。

「これを一晩守れ」

普段着のままで堂の真ん中に座る。

結界が張られ、東西南北に座ったレイン、ケイ、あおい、しのぶのそれぞれの呪文が流れてくれる。

神楽のお囃子のようなものが聞こえてきた。妖怪たちがこちらに向かってきているのだ。百鬼夜行。しのぶは結界の真ん中に道をつくり、たくやのいるところに通す。

たくやはじつと、刀をもつたまま正坐している。

たくさんのあやかしたちは、たくやに気付かず、あちこち走りまわる。

「おやこんなところに刀があるぞ

気づいた者が触ってきた。そのあやかしはすっと刀に吸い込まれる。

たくやは薄く眼をあけた。昔の自分なら逃げ出していたかもしない光景が広がっていた。

たくやは一言の言葉も発しなかった。明け方まであとどれくらいあるのか。背中に、誰かが立っている気配がする。後ろに神経を集中させながらじっと座っている。(何があつても手放すな)

たくやは思つ。

静かに息をしていのところのあたりの妖怪たちを集めた百鬼夜行が収束して刀に吸い込まれていく。集団がどんどん小さくなっていく。妖刀を作る儀式。あとは朝日が昇るのを待つだけだ。

たくやは息をもらす。

妖怪たちは死ぬのではない。彼らは何度でも生まれ代わつてくる。その循環をここに一時閉じ込めておくだけだ。彼らは刀の力となり、刀の中で楽しく暮らし、三年経つと返される。

その期間だけ妖刀として使うことができるのだ。

朝日がのぼってきて堂内を照らし始めたかのように赤く染まり出す。

(まだだ)

まだいる。とたくやは思つ。生臭いにおいが立ち込める。鬼という言葉がたくやの頭に浮かぶ。本堂の四隅から聞こえる家族の呪文。じつと、耐えた。

「刀を渡せ」

耳元で低い男の声がした。

刀を渡せ。

もう一度、大音響で聞こえた。

たくやは微動だにしなかつた。

やがてまた暗くなる。あの赤い光はまやかしだつたとわかる。

今何時頃なのだろう。

ドンドンドンと、足音が後ろでする。

助けて。とあおいの声がした。たくやはそれでも動かない。

助けてなんていうあおいではない。いつも無口で、家族にはそれでも多少しゃべるけれど口数は少なくて。黙つて涙を流しているようなあおいがそんなことを言つはずがない。

やがてひゅつと音がして、矢が床に刺さつた。たくやの体すれす

れのところだ。それでもたくやは動かなかつた。

彼らは直接たくやに触ることはできない。が恐ろしい妖怪たちだということに違はない。

気配が少しづつ消えていく。

本当の朝がくる。とたくやは思つた。

「俺の負けだ」

耳元でまた声がして、刀の中に最後の鬼が入つていいく。ところのが感覚でわかつた。

本当の朝が来た。

唱え続けられた呪文の詠唱が終わつていいく。

日光が本堂を照らしはじめた。

たくやは終わつたか、と刀を置いた。

「今日もちやんと授業あるんだぜ、親父」と。たくやがぼやく。

「あほるか?」

「行くよ」

親父のへせにてんなこと息子に勧めるな。とか言いつつ立ち上がる。

本堂に貼りれた、レインの作った札をケイがはがしている。

「あおいは今田まじうあるんだ」

「補習」

あおいはまじめである。「ほんもやけに学校に出るのだらう。

「ほん作りますね」

レインが言つた。

「ケイ君は食べていくか?」

ケイと呼ばれた青年はさうですねとか答えつつ、少し考え込むようになります。

「今日は早番なんで食べてる暇なもんですね」

「そうか」

ケイはカフュでギャルソンをしている。山を下りたところにあるところだ。

スクーターで行く。

美形だが意外に熱血漢、レインの恋人である。茶色の髪にピアスをしている。すらりとした体はよく鍛えてあった。

「もう一人が急に風邪ひいて休めなかつたんだ」と、ケイはレインに言う。

レインはそう。と呟くように言つ。

「人が付き合い始めたのはいつからだつたのか、どうやって二人がくつついたのかはあおいもたくやも知らない」。

ケイは大学には行かず、喫茶店で働いている。レインは特待生で大学に通っている。二人とも寺に間借りしていた。

ケイの本名は尾道ケイ。レインは渡辺レインと言つた。レインはハーフである。

梅雨にそろそろ入るといつていう気候。過ごしやすい時期だ。

食事が終るとそれぞれ日常に戻る。

しのぶは寺の本堂に一人座す。刀が目の前にあつた。戦いはすぐそこまで来ているとしのぶは思つ。

それなりに寺を守つて生きてきた。妻が亡くなつた後こちらに来てからずっと。

「今日は一日晴れそうだな」

呴いた。晴れ渡つた空に雲が浮いていた。ゆっくりと刀を引き抜く。はこぼれひとつない刀は妖氣を宿していた。

「たくやもここまでになつたか

と。つぶやく。父親らしいことはなにひとつしてやつてないとしおぶは思う。しのぶには息子はたくやひとりだけしかいなかつた。亡き妻の忘れ形見だ。

口応えもする反抗期のかたまりみたいな時期の割には会話があつ

たが。たくやは部活もやらず、仕事となればきちんと仕事をする。本当に親馬鹿と言われてもいい、良い息子を持ったと思つ。

「やれやれ」

過去を振り返るよつになつたら年寄りだと黙つた。それから息子にも話さなければならぬ時が近づいてゐることを知る。妻のことがすべてを。

この晴れ渡つた氣持のこゝ空に、しのぶは苦い顔をした。禁煙して長いが、煙草を吸いたくなつた。

たくやは帰つてくると客が来ていた。自分の部屋に行こうと、客間の前を通ると、背筋がぞくりとした。客間を思わずそろつと覗く。と。妖怪がしのぶの首をつかんでいるところだつた。

「親父」

思わず戸を開け放つ。

「大丈夫だ」

しのぶは刀をすらりと抜いた。妖怪がひるんで首をしめるのをやめる。

妖怪はゆつくつと形を戻し、普通のサラリーマン風に戻つた。

「仕方がない今日は引き下がります」

とネクタイを正して男が言つ。たくやは一歩前に出ると、飛び跳ねて、壁にすつと消えていった。

「今は？」

「刀を狙つてきた者だ。たくや、話がある」

しのぶは言つて、たくやに座るよつに促した。たくやは黙つてそこに座る。

「お前の母親のことだ」

たくやは押し黙る。

「俺の？」

ずっと母親がいないことに疑問があつた。けれど聞けなかつた。

いつか話してもらえるだろうとは思つていたが。

「あなた」

妻は言った。

「たくやを」

妻の綾香は、ほとんど能力を持たない女だった。たくやが3歳の時だった。妻は妖に食われて死んだ。たくやには言つていなし。壯絶な死だった。まだ寺に入る前のことだ。昼間は靈能力者として働いていたころの話だ。しのぶの目の前で、妖怪がマンションの部屋に現われた。部屋にはつてあつた結界に軽々と入り込んだそれは、綾香を殺した。たくやは何も分からずただ泣いていた。

しのぶは全力でたくやを守つた。その時の傷は背中に深く刻まれている。妻の綾香はその妖怪に飲みこまれていった。

たくやはだまつて話を聞いていた。その時なんとか結界に封じこめた妖怪が、出かかつているのだ。

「その妖怪は力のある者を食つて大きくなる」

そして手下が何人もいるのだと言つと、しのぶは黙つた。一人の間にまだ帰つてこないあおいのことが浮かぶ。

「あおいが危ない気がする」

たくやが立ち上がる。

「ちょっと学校見てくる」

たくやが立ち上がり、部屋を出ていく。と、あおいが寺の門を入つたところに立つていた。

「あおい」

たくやが駆け寄る。あおいは黙つて鞄を地面に置いた。風があおいを中心巻き上がる。

「妖怪の気配がする」

「ああ」

たくやが答へ、あおいは両手を上に掲げた。空中から矛が下りてくる。

それを手にとると、ぶんと振った。

「なんか教室からついてきたのがいる」

あおいが構える。

「大丈夫か」

「うん」

私は大丈夫だけど、舞がおかしくなつてたから昇に預けてきた。
とあおいが言う。あおいとたくやの同級生で、同じ学校に通う靈感
のある少女だ。昇も能力を持つている。

「合流したほうがいいかも」

「そうだな」

「携帯かけるよ。とりあえずこいつをどうにかしてから」
と、言いながらあおいが矛を前に繰り出した。空中から腕が出て
きた。人の腕ではない。赤い色の剛毛の生えた鬼の腕だ。
切りかかるとザーッと黒い砂が切り口から出でてくる。

「鬼か」

たくやがざつと後ろに下がった。

「本体が出てくる」

寺の結界にぎりぎりと押し入つてくる氣配。
やがて鬼が顔を出す。

「あおい、たくや」

声がするのでそちらを見ると昇と舞が立つていた。
「氣配を追つてきたの」

と舞が叫ぶ。

四人で囮む形になる。

「舞ちゃん大丈夫？」

昇が言つ。

「だいじょうぶ平氣平氣」

妖気に当たられると調子が悪くなる舞は、しかしその体質で相手
の強さを測れる。彼女が大丈夫といふことは大したものじゃない。
「いぐぞ」

昇が空中から弓を取り出した。長い弓だ。弦に糸が張られているが矢がない。弓を引くと光が集まってきた。矢の形になる。手を離す。ひゅんと音がした。

もういつほん出てきた腕にささる。だが、鬼はそれでも外に出でくる。

「出でくる」

舞が叫び、がたがたと震えだした。

「もつと大きなのも来る」

「舞ちゃん結界張るからこっちへ」

あおいが叫ぶ。「うん。と舞が走る。肩までのストレートの髪が揺れる。

たくやが呪文を唱え、結界を張る。

「いっくよ~」

のぼるが叫ぶ。あおいが矛を構えなおした。たくやが舞の結界を維持しつつ寺の結界の強化もする。

片腕がぽろりと落ち、肩に矢を撃たれた鬼が地面に降り立つた。赤い鬼だ。

ぐるぐると生臭い息とともに声を出した。

鬼はもともと人間だった者だ。他人に操られて鬼になってしまふ者と、自分で鬼になってしまふ者といふ。

自分で鬼になる者は、しゃべることができるのが普通だ。だからこれはたぶん他人に操られて鬼になつた者だ。

「加勢します」

レインの声と、無言のケイ。レインが色のついた札を投げると、そのまま犬の姿に変わる。鬼に食らいついて消えた。

ケイの後ろから影が現れる。

「いけ、道成寺」

ケイが低く言つと影は着物を着た大男に変わり、鬼に向かつて走つていく。激突した。

「捕まえておきますから援護を」

大男は言つと、レインの札が飛ぶ。鬼に張り付くと白い糸が札から噴き出した。顔を覆つたその白い糸を外そと鬼が片手を出す。道成寺と呼ばれた男がその鬼を捕まえる。あおいが矛をかまえ、走る。一瞬道成寺が手を離す。鬼の首に矛がぐさりとささつた。矛から光がこぼれた。鬼が苦しみながら消えていく。

「まだ来る」

鬼が通つてきた穴からまだ何かが来る。舞が失神した。

「大きい」

あおいが小さくつぶやく。それは大きな影だった。

全員が構えた。

「来る」

あおいが言う。

昇が弓を引き絞る。

たくやが呪文を唱え始める。

咆哮しながら大きな鬼が出てきた。

「いくつかの靈の集合体だ」

ケイがそう言いながら立つていて。

レインが静かに札を放つた。何枚かの札が、鬼に向かつっていく。

ぼうつと燃えだした。

「強いな」

「ええ」

全員が構えると、大きな鬼が叫びをあげた。

グルルルル。

ザンバラ髪に緑色の皮膚、腰につけた布、目は赤く光り、口には牙が見えている。

「一気に行くぞ」

たくやが言う。

あおいが矛を構えなおす。

舞が起き上がった。

「大丈夫？」

中でも一番背の低い昇が聞く。

「大丈夫」

昇のほうに鬼が向かっていく。

昇が由矢を放つが、突き刺さって黒い血が滴りおちても鬼の速度は変わらない。

昇がふつとばされた。

「昇君」

氣絶からなんとか戻った舞が叫ぶ。昇は立ち上がった。

「舞ちゃんとハネムーン行くまで死ねないんだよ僕は」

口の中を切つたらしい昇が血を吐く。

「馬鹿あ」

舞がその言葉に叫ぶ。

あおいが走つて矛を突き立てる。白い光が矛からほとばしり、たくやが紡ぐ呪文でそれが大きくなる。

「道成寺さん」

あおいが言う。

「はい」

「できるだけ時間を稼いでください」

「ケイ」

「ああ、行け」

レインに促されてケイがそう言つと道成寺が走る。

道成寺も鬼だ。

人が人のまま鬼になつた鬼。

ケイの眷属だ。

ケイはもともと鬼だったが、レインと出会つて鬼であることを捨てた。

今は人間である。

「レイン」

「札なら何枚でもあります」

レインは言う。

「あおい」

「あおいは頷く。

「光と闇のまじないよ、わが力を光に変え
矛を立てるとき矛が全体に光り出す。」

「我が道を照らせ」

「あおいちゃん」

舞が言つ。

「戦うしかないんだ」

僕らは力を授かつて生まれ、こうして出合つたのだから。
昇はそう呟く。

レインが札で包囲していく。

ケイの周りを風が吹く。

ケイは、袴姿だった。

正装である。

「鬼か」

道成寺が一步、また一步と押されて下がる。ケイはつぶやいたまま動かない。

ケイは、人間に戻った時に、その力の半分を失つた。すべて失わなかつたのは奇跡だつたのだが。

「歯がゆいものだな」

と呟く。

レインが札を使い、また円陣を組む。
雷のような光が札からあふれ出る。

鬼が、やつと動きを止めた。

あおいが矛で貫く。

昇が矢を矢継ぎ早に放つた。

背中に矢を何本もさし、鬼が咆哮する。

「やつたか」

ケイが言つ。

「まだ」

鬼の腕が増えた。

「増えればいいってもんじやない」「昇が言いながら『』を構えなおす。

あおいの渾身の一撃も食い止められてしまった。

「強いな」

ケイがつぶやく。

第一部（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

第一部（前書き）

第一部。ちょっとは話が進んだかな？

数日前のことだった。

アスリートが次々に心臓発作で亡くなつた。その後病院から死体が消えたと新聞で報道されていた。

ケイはその事件との関連を考える。

誰かが後ろで動いているのだ。大きな何かが。

アスリートたちの肉体をつなぎ合わせて、最強の鬼を作ろうとしている、そんな気がする。

「レイン」

ケイはレインに呼びかける。

「札はあと何枚ある」

「5枚」

「なら十分だ。俺も出る」

「ケイ」

「大丈夫だ」

走り出した。

道成寺の横に並んで鬼に掴みかかる。

腕を一本つかむと、めりと音を立てて抜いた。

「力不足で悪いな」

黒い血を浴びながら、ケイは笑う。

「舞ちゃん」

昇が叫ぶ。真っ青な顔をした舞がけなげに立ちあがつた。

「どこかにぱりぱりにできる一歩がある」

舞が叫んだ。

結界で一応遮断されているとはいえ舞には感覚で敵の強さがわかる。舞は見えると相手の力を見極めること以外に何もできない。

足手まといで「じめんね」といつももやつぱり舞に、いつもそんなことないよ。と仲間は言った。

全員でかかれば越えられない障壁はない。とあおいもたくやも思う。

「最後の攻撃行くぜ」

たくやの声。

全員が一丸となる。

あおいがまた矛を構えた。息が上がっている。

「大丈夫」

まだいける。たくやが呪文を唱え始める。風が集まつてくる。レンは札をすべて投げ、空中にどどめる。火がともる。道成寺の首を鬼がつかんだ。

「く」

その腕をあおいが切り取る。黒い血がまた噴き出た。ケイはもう一本の腕をまたもぎ取ると笑つた。戦いこそがすべてだつた時代に戻るような気がして戦いに赴くのは怖いのだとケイの言葉をレインは思い出す。

昇はその隙に鬼の後ろに回る。

弓を構え、矢継ぎ早に射る。矢は昇の中にある力を具現化したものだ。撃てばうつほどに疲労は増していく。男としては小さいほうの成長期だと言い張る身長は164センチ。舞が156センチで似合いのカップルである。

昇が肩で息を吐く。眼の下に隈ができるいる。

「ちくしょうまだ倒れない」

昇がそう呟く。

「強制浄化」

たくやが呪文を唱え終わつて解き放つ。

人間の靈相手なら一発で浄化できる技だが、効くかどうかは分からぬ。

グアオオオオオオオ。

鬼がまた咆哮した。

痛みがあるらしい。顔を覆う。ぼどぼど。と、音がして鬼の肉が

崩れていく。

「やつたか

ケイがつぶやく。

「まだだ

と、道成寺が言つ。

鬼を作り上げてゐる集合靈の一體が一體が淨化されたらしく、崩れてきてはいるが、まだ原形を保つてゐる。

たくやがもう一度呪文を唱え出す。

あおいが今度は頭を狙つて走り、矛はケイと道成寺の間を抜けて刺さる。

目を狙つたのだ。

そこからも血があふれだす。

道成寺とケイを振り回し、鬼がのたうちまわる。

「もう少しだ

ケイと道成寺が離れて、あおいがまた矛を刺した。

腹のあたりを刺すとそこから黒い血がまたあふれていく。

何体かの集合靈のかたまりのつなぎ目を狙つたのだ。

「やつた

昇がそう言いつつ座り込む。

さすがに鬼も動かなくなる。肉塊になり血のにおいがしたあと、消える。

全員が肩で息をしていた。

舞の入った結界が消えて、舞も残留した靈気に触れて体を震わせた。

レインが結界を張りなおすために寺の結界がどの程度壊れたか見ている。

次の敵が来た時のために結界を張りなおす必要があるだろう。

「結界の張り直しが必要です」

レインがそう言いつつまだなにも書いていない白い紙を出して空中に放り投げて術を唱える。

「これでしばらく大丈夫」

「うちの結界、だいぶゆるくなってるんじゃないか」「たくやが言ひ。

「そんなことはないですが人間は入れるようになつてますから人間に寄生して入つてくるものが防げないだけですね。今日みたいなのが来ちゃうとちょっとやつぱり弱いかなと思いますけど」

「今日みたいな大きいのがいくつも来たらお手上げですね」と言いつつお茶にしますか。などとのんびり言ひ。

「俺は貫徹で眠いから寝る」

「じゃあ昇君と舞さんは来ますか」

「わーい」

レイン手作りのお茶菓子が出るのだ。

甘いものが好きな舞とそれなりに女の子になつてきたあおいがお茶に参加する。昇も当然一緒だ。

「ケイは？」

「バイトの途中で抜けてきたから仕事に戻る」

「残念ですね」

「俺の分の茶菓子残しておいてくれ」

「ここにも甘党がいる。道成寺はケイの影にすうっと吸われていく。

「さてと」

「眠い」

「行きますか」

とにかく寝たいと呟きながらたくやも全員の後についていく。

寺の奥で、しのぶは座っていた。
しのぶは思つ。

あおいを引き取ったのは導きがあつたからだ。レインは一族の支流から出た卓越した能力を持つ符術師。ケイは、前世でレインが惹かれてしまつた鬼だつた。ケイは眷属がいて、その眷属も実体化できる鬼だ。ふだん呼び出されないとときはケイの影に隠れていって、ケイの呼び出しに出てくる。普通の男にしか見えない。

そしてたくやのことを思わなかつた日はない。一人息子である。大事に育てたとは言い難いが、それでもここまでグレzuに育つた。どやどやと寺に人が入つてくる音がした。

「しのぶさま」

「なんだ」

「お茶が入つたので一緒に飲みませんか」

レインの声だった。

「わかつた」

しのぶがそう返事をしつつ刀を持って部屋を出る。

「刀を使える人間はうちにはひとりだけか」

刀は刀を使う者を選ぶ。

みんなでお茶をしている中、着替えて出て行ひと顔を出したケイにしのぶが言ひ。

「ケイくん」

「はい」

「これは君に任せよう」

と。しのぶは刀をケイに渡した。

「いいんですか」

「ああ」

「あ、たくやくんなら、寝ると言ひて自室に戻りました」

レインが言ひ。

「そうか」

貫徹できつちり授業までうけてきたら眠いに決まつてゐる。あおいは別だが。

「ケイくん

「はい」

「『』の刀の靈力を永遠にする力は、君しかもつていらない

「そうですね」

かつて鬼であり、今も靈力を持つケイは、闇の力をその刀に補充できる。

「でもこれもうちちやつて、たくやくんに悪い気がするんですが」「あれにはあれのやり方と戦いがある。大丈夫だ」
しのぶの言葉に、ケイは過去をたくやに話したんだなと思う。ケイトレインは、たくやの母親がなぜなくなつたのか聞いていた。それをずっと押し隠していることも。

「あーあ」

眠くて布団に入ったのだが、眠れない。

たくやはひとりで呟いた。母親のことを聞かされて、それなりにショックだったのだが。

母親がいないというのが当たり前で育つてきた。母親がどんなものか知らない。

ただ、自分から母親というものを永久に奪つた者には憤りのよがなものを感じた。

今がそれなりに幸せだけれど。母親がいたらもっとと樂しいんじやないかとか思う。

「なんかなあ」

考えるのをやめた。

代わりにあおいの『』とを考える。

最初はなんとなく苦手で何を考えているのかわからなかつた。そのうち、いろんなことを表に出せないんだなと気づいた。たくやつて呼んでいいというと、うんと言つてほほ笑んだ顔を覚えている。長い時間、一緒にいて、この先も一緒にいたいと思つ。

たくやは田を開じて歸りつゝと思つた。

「たくや、夕食の時間」

あおいの声で田が覚めたたくやは大きなあぐびをしながらわかつたと答えてベッドからもそもそと起き出す。

「あおい」

「ん」

「宿題手伝ってくれ」

「なんの?」

「英語。明日一番で当たる」

「わかった」

あおいは頭がいい。一度言われたことは大概覚えている。授業だけ受けていても十分ついていけるはずだが、補習も受けている。

高校は私立の特待生を狙っているらしい。特待生なら授業料を払わなくて済む。

それにくらべるとたくやは赤点きつぎりである。

塾に行くような余裕はうちの寺にはないしなあ。とかつぶやく。

「ん?」

「あ、ああ、なんでもない」

なんでもない。未来についてなんて今は考えられない。

夕食の席につく。

「ほんを食べて、また部屋に戻る。

「たくや、勉強」

「ああ」

「どいでやる?」

「下の」飯場のテーブル片付けてやるか

「うん」

じゃあ先に行つてる。と言いつつあおいがひつこむ。

たくやは勉強道具を持つと部屋を出た。廊下に出ると、田が出て

いた。きれいな月だ。

「きれいだな」

たくやまひととき足を止めて、また歩きだした

第一回（後書き）

読んでください。ありがとうございます。

第三回（續）

「おまえで読んでくれたからあつがヒーローです」と、まだ続きます。

あおいは宿題を学校で片付けてから帰つてくる。舞と昇は弓道部なので彼らと一緒に帰つてくることが多い。

宿題を片付けて帰つてきて毎晩矛の練習をする。

朝も早い。きつちり補習に出る。先生受けは割といいほうだ。学年トップか一番くらいの成績を毎回たたきだしている。

友達は少なく、寺に引き取られている両親のいない子だとみんな知つてゐるためか、小学校のころはいじめられた。が、中学に入つて成績が良いとわかるといじめはなくなつた。

あおいはふだん口数が少ない。いつも怒つてるようにさえ見えるせいか、人が寄り集まるような性格ではない。

一度昇が風邪をひいて休んだ日に学校でばけものが出て、動けなくなつてゐる舞を助けてから舞と昇に、同じ能力を持つんだとわかつてもらつて、それから友達づきあいをしていく。

聞いた話だが、昇の家も代々靈能力者を出す一族で、昇は弓を使つて化け物を攻撃できる。

靈を浄化する能力はあまりないそうだが。

あおいはひきとられるまで体が弱かつた。そういうものを片つ端から浄化してしまつ体質だつたせいもある。それを眼鏡でおさえるようになつてから体の調子がよくなり、運動もできるようになった。それが楽しくて、矛を受けられた時からずっとその練習を欠かしたことはない。

「私には何にもなかつた」

とあおいは思う。何もなかつた。親もなく、体が弱く、しのぶと出会つたのは、孤児院から抜け出した夜のことだつた。孤児院で探している人間がいることも分かつていて。けれど。あおいは、今日の夜外にでなさいというやさしい声を信じた。その声が誰の声だったのかは分からぬ。しのぶに出会つた時、しのぶは大丈夫かとかげよつてきた。10歳のころだ。

学校にも行けないくらい虚弱体质だったのもあつたが、靈を浄化しているのにしのぶはすぐに気づいた。

それから孤児院に連れてつてもらつたが、すぐにしのぶが引き取つてくれることになった。

あおいが引き取られた時、たくやもまた10歳だつた。仲は悪くもなくよくもない。という関係になつた。一緒に遊ぶようになつたのはそれから一年もしたこりだつた。

たくやは呪文を使うことのほつが得意だつた。あおいは矛を渡されるとそれが前から彼女の武器だつたかのようになじんだ。

「普通逆なんだがな」

とたくやは言つた。でも俺は矛を振り回したりするよりこのほつが向いてる。

とあおいにたくやは言つた。適材適所なんだうと一人で答えを出した。

あおいは学校の成績はいいほうだ。体も毎日動かしているせいか体育の成績もいい。ただ、ひとつだけ欠点があつた。引っ込み思案で分かつていてもなかなか発言ができるないあおいは、ペーパーテストはできるのだがそれで成績を悪くつける先生もいるのだ。あおいたちの住んでいる地区は成績の内申点の合計がある程度ないといい学校には行けない。

「たくや」

「なんだ」

「卒業したらどうするの」

「就職ってわけにいかないからな、どうか高校に潜り込む」

「たくや今の成績じゃ無理かも」

「そりかな」

「うん。勉強見るから、もつと頑張つたほうがいいよ」

あおいはたくやにはしゃべる。人前でしゃべることはあまり好きではないが、あおいはたくやとしゃべるのは好きだった。

「じゃあとりあえず宿題から見てくれ」

「うん」

あおいはたくやと勉強しながら自分の宿題も片付ける。

「英語のノート作ってる?」

「作つてない。教科書に書き込んでる」

「ノートの見開き片方に英語、片方に訳書いて、問題集みたいに使えるようにしたほうがいいよ」

「そりなのかな」

「うん」

授業はほとんど寝てこるたくやは、それでも授業中に教科書にメモとるくらいのことはしていたらしい。

「あとは辞書をまめにひいて単語を覚える」

「うん」

「授業はどこまで進んでるの?」

あおいとはクラスが違つ。たくやはええとと聞こつつ本を広げる。

「レッスン4」

「じゃあ4の英語をノートの左側に三行あけながら書いて」

「ノート持つてない」

「じゃあ持つてくる」

「ありがとう」

そんなことを言しながらその夜はふけていった。

ケイの朝はシャワーから始まる。

ケイとレインは寺の横にある一階建ての建物に住んでいる。あおいたたくやとしのぶは寺の境内にある家に住んでいた。寺は密教系の寺だが、詳しいことは知らない。

「さつぱりした」

朝ごはんは寺のほうで食べる。レインが用意しているんだ。ケイは着替えると外に出た。

ざあつと氣持のいい風がふいた。

刀は肌身離さずに持っている。今日は試し切りをするつもりだ。竹でも立てて切つてみるか

刀そのものは最初ぼろぼろの刃のついた靈力もまったく感じられない刀だった。それが祈りと呪術によってよみがえった。

「なんにせよまづごはんだな」

朝ごはんは生活の基本だ。とケイは思う。バイトは今日は休みだ。そういうえばバイトの日は刀はどうじよつかと考える。持ち込んでこつそりロッカーにでも入れておくかと思つ。

「ケイ、ごはんどれくらい食べますか」

「いつも位でいい」

「はい」

寺の奥のしのぶたちが暮らす場所の食卓にたくや以外そろいつ。たくやはいつも寝坊ぎりぎりに食べて出でていくのでいない。

ケイは昔は刀を持っていた。まだ武士と呼ばれる人間が「じうじう」といたころだ。今の「ご時世」で刀なんて持つていたら大変なことになる。もちろん無許可の刀だ。

「今日はさんまか」

朝ごはんはさんまに味噌汁にご飯、それからホウレンソウとキャベツの炒め物だ。

ケイはさんまが好物である。

「道成寺さんはごはん食べないの?」

と、あおいがふいに聞いた。

「道成寺は俺の靈氣を吸つて生きてるからな」

「ふうん」

道成寺はケイの影になつてゐる。実体化する時はケイの靈氣が削られることになる。それでもケイは平氣だつた。人間としては莫大な靈氣を持つためだ。普段放出しすぎて変な靈を寄せ付けないために適度に靈氣を使う必要があつた。道成寺が個別で動けるようにもできるが、普段は道成寺はケイに寄生している状態だつた。

ケイは、レインの前世とも出会つていた。彼女が亡くなつてから日本が戦争になり、外国にわたつて、帰つてきて数十年経て、生まれ変わつたレインとまた出会つた。

レインはケイを覚えていた。

ずっと何度も見る夢の人ですね。と彼女は言つた。俺と一緒になつてくれるか。とケイは聞いた。そして、もう人間に戻るとも言つた。

ケイは靈力を半分にする代わりに人間にしろと地獄で閻魔大王に詰め寄つた。

ケイは鬼だつたが閻に属するものを退治して金をもらひ仕事をしていた。

その関係で望みはかなえられた。ケイはレインと暮らしだした。後悔はない。一度は捨てた人生をやり直してい。そう思つ。

「ケイ」

「ン」

「お茶です」

ぼんやりしてますね、まだ眠いんですか。とレインが聞く。あくびまじりにそうでもないんだがと答える。

「今日は仕事ですか」

「今日は仕事休みにしてもらつた」

「じゃあ、買い物つきあつてください」

「ああ」

「卵が切れてしまつてるんで」

「ああそれで今日は出汁巻き卵ないんだな」

「ええ」

「「」ひそり今までした」

あおいが言つて立ち上がる。

あおいは用具の入ったかばんはもう用意して口においてあるのでそれを持って学校に行くだけだ。

ケイはあおいのような学校に行つたことはないが、読書が好きで、それこそ昔の書から最近のライツノベルまで読む。乱読するのが好きなのだ。

しのぶが無言で立ち上がり本堂のまづに行く。毎日の朝の読経のためだ。

あおいが出ていく。

「行つてきます」

もつと早い時間に出でていくこともある。レインが朝寺の前を掃除するのだが、その時に行つてきますとこう声が聞こえることがある。ケイは布団の中でそれを聞く。

「しかしまあ

ケイが言つ。

「なんです」

「うちの人たちはみんな早起きだよな」

「ケイは割と寝坊ですよね」

レインがわざり。

「たくやほどじょなこだ」

「ええ」

「たくやはあれば低血圧らしいな」

「そうなんですか

「風邪で病院行つて血圧が低つて言われたらしくて
低血圧は起きるのこりつて」

「レイン」

「なんですか」

「食材買つたら本屋付近で買ってくれ」

「いいですよ」

レインは笑う。

「昨日買つた二冊はもう読み終わつたんですか」

「ああ」

ケイの部屋ととなりの部屋は本でいっぱいである。ケイは寝ると
ころ以外は全部本とこう環境でないと眠れないらしい。一回読んだ
本はほとんど覚えてこむ。あおこと同じで、記憶力が抜群にいいの
だ。

「そのうち家が本でつぶれますよ」

「まめに古本屋に持ち込むか」

「今着払いで本を送れるところがあるらしいですからそれで送つた
らどうです」

「そうなのか」

ケイは言いつつも「飯を食べる。

「そんなに急がなくてもまだありますよ」

「うん」

一人で食べているとなんとなく恥ずかしい。

「レイン」

「なんです」

「お前大学のほうは？」

「今日は午後からの授業です」

と答える。

ケイはレインのことが好きだったが、レインがケイのこと好き
かどうかはいまだに聞けずにはいる。一緒にいられる時間は短いのだ
からとは思つものの。

「遅刻だ~」

「「」はんは?」

「食べてこきまつす」

たくやが走り込んできた。

ケイはなんとなくほつとする。

「はい、『はん』

「いただきます」

「あおいは？」

「もう出でにきましたよ」

「相変わらず早いなあ」

「たくやくんは低血圧だって聞きましたね」

「あ～うん。 そうなんだ」

低血圧じやしょうがねえよなとか自分でぶつぶつ言つながらたくやが『はん』を食べ始める。いつもの食卓の風景だ。

「親父は」

「もう読経に入つてます」

「俺が一番最後か」

「いつものことだろ」

ケイが笑う。

「そうだけじゃ」

たくやは一時間田きりつぎりに学校に出てこぐ。 昨夜はあおいにしつかり勉強を叩き込まれた。

「なんか頭が良くなつたような気がする」

気のせいだろうが。 でも多少は進歩した。 どうせつて努力すればいいのかがわかつてきておおしろいのだ。

「なんかあおいに勉強教えてもらつたら勉強できるようになる気がする」

レインがほほ笑む。

ケイが笑う。

「勉強頑張つてください」

「うん」

考えてみれば、毎日呪文を覚えていて、呪文は完璧に暗記しているたくやだ。 やりつと思えばできないことはないだろ？。

「俺よりは少なくとも勉強できるだろ」

ケイが言つ。

ケイは数学とかは全然できないが、英語とフランス語はペラペラだとたくやも聞いていた。大体うちの住人は胡散臭い人ばかりだよなと思う。たくやもその一員なのが。

「寺を継ぐつもりはないし」

とたくやが言つ。

「そうですね、寺はあおいさんが継いでもいいですし」

とレインが言つ。

「そうだな。あおいのほうが向いてると俺も思つ」

たくやがしみじみ言つ。

寺は、墓がない。檀家もない。考えてみれば変な寺だった。結界を張り、妖怪たちの通路を作りここで食い止める役目を果たしているような気がする。しのぶのところに来る客も変だ。時々なんかやたらとえらそうな人が来たりとかするし。

たくやは思う。考えはじめれば変なことだけだ。

「まあ何にせよいつてきます」

「ほんを食べおわりたくやはそう言つと走り出す。

「低血圧の割に走るのは早いですよね」

「ああ、もうすこし早く起きればいいんじゃないかと俺は思つが」
レインとケイが一人でそんな会話をしていることなど知らず、たくやは学校に向かった。

「黒木さん」

「はい」

あおいの本名は黒木あおいといつ。

「この問題はわかりますか」

「ええと。1~3ですか」

「はい正解」

前に出て式を書いて。と言われて出ていく。あおいは勉強は好きでもないし嫌いでもないのだが。まあ、あやかしと戦うよりは樂だし。とは思つ。漠然と先生になつてみたいなとは思つてゐるのだが、別にこれになりたいといつ強い動機があるわけではない。読書も好きだが、ケイみみたいにたくさんは読んでいないし本を買つのはほとんどない。図書館の本を利用している。大体小遣いも円三千円でそこから貯金までしているくらい金を使わない。服もさほど持つてゐるわけではなく、それでも最近は女の子らしい事にも興味を持つようになり、舞とケーキバイキングに行つたり一緒に服を買いに行つたりしている。

「では次の問題に行きます」

授業は進んでいく。

授業の最後に宿題はやつてきたかなと先生が言つ。あおいは宿題をやつてきてあつた。バインダーを出すと、宿題のプリントをはさんであるのを出す。

「はいじゃあ、後ろから集めてきてください」

と言つ声に、あおいが違和感を感じてそちらを見る。誰も気づいていないが、あおいの周りに結界が張られたのがわかる。

「何か用ですか」

あおいは低く声を出した。眼鏡をとる。これだけでも退散する靈は多いが、これは普通の靈じゃないとあおいは直感した。

「お前たちがいくら退治しても代わりはいくらでもあるんだ」

と。少年の姿をした何かが語るのをあおいは見た。

「どうしてこと」

あおいが言つと結界が消える。

「何が言いたかったんだろ」

あおいがつぶやきつつ眼鏡をまたかけなおした。

「最近またぶつそうだよね」

と、舞がソフトクリームを食べながら言つ。

「そうだね」

とやはり同じ牛乳ソフトクリームというソフトクリームを食べつ

つ昇も言つ。

「ケイさんが、アスリートを殺して鬼に仕立てたのがいるんじゃなかつて言つてた」

「そういえば連続してなくなつたことあつたよね」

と舞が言つ。アスリートの筋力と精神力を宿した鬼。考えたくもない。

普通の人間が鬼になつたものでさえ、苦労するのに。

「ノルディックファームのアイスつて高いけどおいしいよね」

全然脈絡ないけどさ。と昇がまた一口ソフトクリームを食べた。

「うん。でも」

「でも?」

「太りそう」

「時々食べるだけならたぶん大丈夫だよ」と根拠なく昇が言つ。

「私が太つても好きでいてくれる?」

「もちろん」

昇は笑つた。約束だからね。と舞が言つ。一人で手をつけないで帰る。

舞の家の前で分かれて、昇は自宅に帰る。昇は高校生になつても弓道を続けるつもりだった。

昇は手をのばして弓を引くポーズをとる。弓が現れた。矢はない。

「やめた」

ふつと弓がなくなる。

最近の昇は弓のことと舞のことしか考えていない。実はお嬢様の舞を嫁にもらいうにはしっかりした会社に勤めなきやならないから、勉強もしつかりしようとか、舞を中心に世界が回っている。幸せだ

つた。

舞は帰ると着替える。普段着ているのはふわふわのフリルのついた服である。母の趣味だ。舞の母親は霊能力者で、今まで何人の人を見てきた人だ。

父親はいくつかある会社の社長で、毎日飛び回っている。

「舞、昇くんは」

「今日は家に帰るつて」

「舞」

「はい」

「いい、男はこれだつて思つたら奪うつものよ」

「はい」

舞の母親はおつとりとした舞を心配する。

霊能力は見える能力だけ受け継いでしまつた舞を昇が守つていることを母親は分かつているようだ。

舞は、昇のことが大好きである。一田ぼれだつた。舞が襲われそうになつてゐるときに助けてくれた時に初めて名前を聞いた。ずっと舞さんのこと見てましたつて言われて本当にうれしかつた。

「昇くんは私と結婚してくれるつてずつと言つてるの」と舞は言う。

「そう」

母親が笑う。

「笑わないで」

「ええごめんなさい」

かわいらしいカップルねと母親に言われる。昇はずつと一緒にいようねつていつも言つてくれる。舞は昇信じてゐるし、すでに校内では公認カップルだ。

舞が不思議で仕方がないのはたくやとあおいの関係だった。たくやもあおいもずっと一緒にいることをお互い信じてゐるのに言葉に

出さない。と舞は思つ。一人の間に何の約束もないのに不安にはならないのだろうかと思つ。あおいにたくやのこと好きなのがって聞いたことがあったが、真っ赤になつてうつむいていたから好きなんだろつと思つ。たくやには昇が、あおいのこと好きなのかつて聞いたらまあそりやあ好きなんだけどとかなんとか言つて「まかされたらしい。煮え切らない一人をなんとかくつかせよつと思つてるのが最近の舞である。

「今日のこはんは何?」

お手伝いさんに聞きに行く。

「今日は日本食ですか」

とお手伝いさんは答える。朝と昼は母が作るが、夕食はお手伝いさんが作ることが多い。家にいれば母の靈能力で守られているので家の中には変なものが出てことはない。母は毎日夕食の時間ぎりぎりまで結界を張りなおしていふ。レインさんみたいに札を書ければなあと舞は思うが、札を書いてもそれに込めるほどの靈能力はない。視ることと力を推し量ることと、弱点を言こと当てる」と、舞にできるのはそれだけだ。

「ケイさんがよく歯がゆいつていうけど、私もそうだな」

と独り言をつぶやきながら自室に戻つて携帯を見た。昇からメールだ。

「今日も楽しかった。明日も楽しく学校行こうね」

か。うきうきして返信する。

ずっとこんなふうに一緒にいられて、好きでいられたらい」と思う。舞の両親は全然違うことを仕事にしてそれぞれその世界で一流になつて、その上でお互いを愛し合つて結婚を決めたのだという。浮氣なんてしたことがないし、たまに一人でデートと称して出かけてしまふことだつてある。舞にとって理想の夫婦とはあんな感じでずっとといられることだと思つ。

昇に返信してしまつと、舞は椅子に腰かけて今日の日記を書き始めた。

日記には毎日の出来事が書かれている。今日はぬまぐるしご一日
だった。

調子も悪くなったりしたけど。大丈夫だったし。
うん今日もいい一日だった。と書く。

「明日の宿題をしよう」と

舞は宿題のノートを出した。

第三部（後書き）

よんでいただきあつがといづれこます。

第四部（前書き）

日常を描けていればいいなと思つて書きました。
読んでいただけすると嬉しいです。

レインは急いでいた。

授業が終わり、走つて電車に乗り込む。なんとか潜り込んだ。電車は帰りの学生でいっぱいである。立つたまま外をなんとなく見ながらゆかれていると不思議な気持になった。時々起きる感覚である。レインはハーフだったが、あまり気付かれたことはない。髪は黒く、目も黒いからだ。日本人の母にイギリス人の父を持つ。大学は日本の大学に行きたくてイギリスを出た。札を書けるのは幼い時からだつた。守護霊が教えてくれたのだ。その守護霊の声は、ケイと出会うと消えた。

覚えなければならないことはすべて教えたと言い残して。

下宿先にとしのぶの寺を勧められて、住んだ近所にケイが住んでいた。ケイと出会った時、このために日本に来たのだとレインは思つた。

がたんと電車が駅につき、乗り換える。

今度は始発だ。座れる。

レインは手帳を出した。明日の授業の予定を書き込む。今日は少し家でも勉強しなければならないだろう。レインは大学では留学生の枠でおかつ特待生として通っている。特待生だとお金がもらえるのだ。寺の下宿代はそこから出している。

家計簿を二つ出した。

寺の家計と、自分の家の家計、両方を任せられている。きちんと金銭の管理もする。

「あとは寝る前に札を三枚書いて」

と呟いて、足もとに何かがいることに気づいた。

キツネだ。とレインはとひそに思つ。ビビから連れてきてしまつたのだろう。すりすりと足もとに寄つてくれる。まだ子狐の靈だ。親からばぐれたのかと、レインは思い、靴の中になにかが入つていたふりをしつつ狐を抱き上げる。

あなたのところで育ててやつてくれ。と耳元で声がした。この声には聞き覚えがある。学校の裏にある祠の主の声だ。分かりましたとレインは口に出さず思つ。

キツネはレインのひざの上で丸くなつてくつくつと寝始めた。

「で、連れてきたのか」

ケイがなぜか警戒するよつて言ひ。

「どうしたんですか」

「いや、笛管使いにひどい目にあわされたことがあつたんだ」「管使いとは、狐の靈を使って靈力行使する者の総称だ。

「苦手なんですか？ こんなにかわいいの？」

「いやかわいいことはかわいいんだが」

おそるおそる触る。

「何連れてきたんだ」

たくやが覗き込む。ケーンと小ねく鳴く。

あおいもこんな小さこきつねを見るのは初めてだと、じつと見つめている。

あおいは力の大部分を眼鏡で封印しているが、見る」とはできる。かわいいとあおいがつぶやく。

「しつかりしたキツネだな、靈格も高い。結界もなんなくクリアしているしな」

ケイはそう言つと、今口試し切りで使つた竹を差し出した。中に入ると入つていぐ。

「これでしばらく飼えぱい」

「ありがとう。とりあえず部屋に置いてきて、夕食作ります」

そのために急いで帰ってきたのだ。

「今日の夕食はカレーですよ」
たくやとケイが万歳した。

ちなみにカレーの具はトマト、ニンジン、じゃがいも、たまねぎ、
鳥の手羽元である。

夕食を食べていると、狐がレインを探しにきた。

「どうもレインを母親だと思つてゐる節があるとケイが言つた。レイン
もそれがいやでないらしく、かわいがつてやる。

「いろいろ覚えさせてあげたほうがいいんぢやないか
とケイ。

「（）はん食べるかしり」

とあおこ。

「カレーを食べるかなあ」

とたくや。

「まあとつあえず席をひとつひいてあげなさい」

としのぶ。

客間にあつた座布団をひとつ置いてやると、横になる。かわ
いこわかりの狐だが、しつけはしつかりしている。野狐ならいたず
らのひとつやふたつするところだが。

「（）かの神社の使い狐の系列かなんかかなあ」

たくやが言つた。

「ああ、そうかもね」

あおいが言つた。

「学校の裏手に小さな祠があつて何回かお参りしてゐるんですが、そ
この神様に頼まれたんですよ」

レインが言つた。

「うちは寺だけどなあ
とたくや。

「寺に神様が祭られるのはそんなに珍しこじじゃな」
ケイが言つ。

「日本つて本当におもしろい宗教形体しますよね」
レインがそう言つ。

「ああ」

ケイが返事した。

たくやがカレーをひとさじすくつて狐の前に出した。

「カレーは興味ないみたいだな」

黙つていたしのぶがカレーを食べ終わつて、おまかせと並んで立ち上がる。

「今日は少し出かけてくる。明日には帰るとゆうが」

「行つてらつしゃい」

あおいが言つ。

「どこに行くんだ」

とたくやが言つ。

「聞かない方がいいだろ」

「じゃあ聞かねえ」

と送り出した。

しのぶは電車に乗つていた。

ふた駅のつて降りる。

「ここか」

金融業者の入つているビルに着くと中に入つていく。

「いらっしゃいませ」

「ここにいる林さんといつ人と話がしたいのだが
「少々お待ちください」

待たされて応接室に通された。

「林です。わざわざなんで出向いてきたんですか

昼間に来たセールスマンだ。笑う。

「中野くん、お茶はいいからひまじぱりへなでくれ」

「はい」

中野と声をかけられた受付嬢がひつゝむ。

「金を借りにきたわけではない」

「何をしにきたんです」

「話をするために来た。その闇を飼い続ければ元に戻れなくなるぞ」

「そんなことわざわざ言われなくとも分かつてますよ」

僕にはもう何も残つていないので。だからこのまま闇の世界の住人と暮らすほうがいい。

林はそう笑う。

「そうか、残念だ」

しのぶはそう言つと、数珠を取り出した。

「祓つつもりですか」

「いや、封印する。すでにお前はもう半分闇に飲まれているからな無茶を。ここがどこだと思つてるんです。ここは寺ではない」「わしももう死んでもかまわないとずっと思つている」

「ぐ

呪文を唱え始める。

「縛」

男は床に転がり体をくねらせて苦しむ。やがて動かなくなり、起き上がつた。

「お札を言つべきですね」

と林は起き上がりつて言つ。メガネをかけなおした。

「こんなにすつきりした気分はありません。でも闇を封印しても光があれば闇が濃くなるように、また僕は刀を狙いますよ」

「かまわん。何度も封印する」

林は笑つた。

「おもしろい方ですね」

林はそう笑う。外に出たついでだとしおぶは言い、立ちあがる。

「送つてこきましょうか」

「いやいい」

これからしのぶは墓に行くつもりだった。

亡くなつた妻の墓。

亡くなつてから年に一度だけまいりに行く。

「今日は命日でな」

林に聞こえるか聞こえないかの声でしのぶはつぶやいた。
しのぶは妻の墓に参る。以前住んでいた近くの寺に納めてもらつたのだ。そのあと今の寺の住職になつた。夜中の墓地は静かなものだ。静かに線香を立て、近くのデパートで買って来た花を挿す。
死んだ者は生き返らない。言葉を交わすことももうない。靈になつて出てくることはたまにあっても切れ切れの言葉だけ聞こえる程度だ。しのぶは靈感はそんなになかつたが、鍛練でここまで来た。本当は妻のあとを追つて死のうと思つたこともある。だが。大きな集団が動いていることを知ると、生きてたくやを守りながらそれと戦うことを選んだ。たくやがもう自分の手で守らなくとも大丈夫だと思つた時、しのぶは自分の役目は終わつたと思つた。

「早くお前のところに行きたい」と呟く。

何を弱気な」と言つてるの。と妻の声が聞こえたような気がした。

「たくや」「なんだ」

「今日の復習と明日の予習するよ」

「おう」

たくやは返事すると宿題も一緒に持つて、英語のノートを持つて降りてくる。

いつも「はんを食べている机で一人で勉強する。

「ええと。私も勉強があるから全部見てあげられないけど、英語はノートをひつやつて書いて」

と並んで、自分のノートを出す。

「前と同じようにすればいいんだよな」

「うん」

で、練習する時はまず英文を何度も書いて練習して、次に隠して書いてみて書けなかつたところはまた何回か書いて覚えてまた日本語見て書いて。つてやつてくと覚えられるよ。といつ。

国語の漢字書き取りテストもあるのでそれも覚える。

「今度のテストの範囲はきつちつやつて成績上げていかないと」

「そうだな」

「みんなも勉強してるから、頑張らなきゃ」

あおいは言つ。がりがりと書きながらたくやはふいにあおいを見た。あおいは寺では眼鏡をはずしていることが多い。靈がない環境だからだ。近くにあるその顔は見慣れてはいるけれど綺麗で。たくやは自分があおいを好きだと直覺する。別に顔から好きになつたわけじやないけれど、たくやは本当にあおいがかわいいと思つていた。

「どうしたの」

動きを止めてじりじりを見るたくやにあおいは聞く。

「なんでもない」

たくやは誤魔化して手元のノートを埋め始める。

漢字は広告の裏とか知らない紙に漢字を書いて覚えていったん自分でテストしてみて書けなかつたところを重点的にやつて、全部覚えられたら明日の朝もう一回テストしてみるとこと思つよ。とあおいは言い、たくやはそつかと言いつつ漢字のノートを開く。

「一ページ埋めてくるのが宿題で出てるんだ」

「じゃあ、一回問題集を解いてノートにたくやの考えた回答を書いて、答え合わせして間違つた漢字と書けなかつた漢字を練習すればノート一ページなんてあつと言つ間だから」

あおいは言いつつ自分の宿題のプリントを始める。理科のプリントだ。

「私は暗記系は得意だけど数学系が弱いから」

「なんだ」

「うん」

「なんでもわかつてるとと思つたとたくやは言おうとしてやめる。あおいがどれくらい努力して今の学力を保つてているか知つているからだ。

「数学は先生に聞いてやる」と思つてゐる

とあおいが言う。

「高柳先生か？」

「うん」

「あの先生教えるのうまいよな、俺もあの先生の授業になつてから数学赤点なくなつたもんな」

「たくや」

「なに」

「今度大量赤点とつたら親呼び出しかもしれないよ」

「そうだった」

前回のテストでも追試を受けていたのだが、今回も追試がたくさんあるようなら親に来てもらひと担任から言われていた。

「あおい」

「ん？」

「俺私立の高校行くから、お前同じ私立で特待生になればいい」

「その私立もたくや危ない」

「そなんだよな」

「これからみんなも勉強するから、頑張つても成績が上がらないかもしけないし」

とあおいが言つ。本当にその通りだ。三年生になつて部活がなくなるとそれから頑張り出す人も加わつてくる。特に一人が通う県内の高校はどこも内申点重視で、テストの点数がどれだけよくてもふだんの成績が悪ければ落ちる。

「脅すみたいだけど、しつかりやらなきゃ」

「そうだな」

たくやはあおいの言葉に素直に頷く。本当に先生みたいだなとたくやは思つ。

「学校の先生向てるよなあおし」「

「買ひれば不才に思はうと思つたが、人前でしゃへるの苦手だから」

「惜れれば力又失かべ」と思ひセ
「それよ!」也教えがたか上手い

「そうかな」

「ああ」

たくやせ答えた。手を繰ぐのもいいと懸りたゞな。とたくやは

1 VTPR

「別に親父は決めてないみたいだし、俺は普通の会社に入つてみ

たい

「うーん。朝起きたのは苦手だナビなー

たぐせせり

卷之二十一

「そうだけど」

「まあ親父がどう言うかだな」

「眠くなつてきた」

「あと一息だよ、宿題たまには全部出したほうがいいよ」

「呼び出しがらつてたのを職員室で見てた

「親父には言つなんよ」

三三二

「あおにせぬが。ふるむてかうめぐらす。」
つたことない。とあおこはぬい。

あおいはたくやの父親のことほしのぶさんと呼ぶ。

「親父は説教はしねえけど、怒ると怖い」

と言ひ。

「別に勉強のことでは怒らないと思つけれど」

「でも静かに怒るだろ」

「うん」

「それが怖いんだ」

たくやは言つ。

たくやはひとつてしのぶはたつた一人の父親だ。家族は増えたが血のつながった家族といえば一人しかいない。親戚づきあいもほとんどなかつた。レインは親戚らしいが。

大体秘密が多すぎるんだうちの寺は。とたくやは思つ。大きくなつたら教えてやろうと言われてうやむやにされるのがいつものことで、たくやはそのうち気にしないように努めるようになつた。呪文をなぜ覚えなければならぬとか、そういうこともいつも思つていた。そしてあおいに見えて自分に見えない霊たちの声が聞こえるようになるまでたくやも頑張つたのだ。たくやの持つているその能力は生まれつきの靈感ではない。長い休みのたびに山にこもられた結果だ。小学校のころも宿題の出せない生徒だったが、中学になつても宿題の出せない生徒なのは仕方がないといえた。

「確かに怖いけど」

しばらく何も言わず、ただ、先生に迷惑がかからないようにしなさいとは言われる。宿題は寺の行事で出せませんと先に言つようになつた。あおいは寺の行事があつてもきつちり宿題も出していた。たくやは山籠りさせられたが、男しか入つてはならない山の中で。あおいはそれを免れて、早くたくや帰つてこないかなと思いながら家できつちり宿題をして、あさがおの日記も毎日書いた。そんな小学校時代だった。

二人は黙りこんでしばらく宿題をする。

「こんばんは」

レインの声だ。

「ジューク買つてきました。飲んでください」

と、オレンジジュークのペットボトルを一本置いていく。

「勉強頑張つてくださいね」

「ありがとうおやすみなさい」

「ありがとう」

二人は差し入れをありがたく飲んだ。

次の日たくやは宿題を出して、珍しく教室で発言した。英語の発音の読みの宿題である。つかえつつかえ言えば成績につけてもらえる。

「がんばったな」

と先生が言う。そんなことを言われるのは初めてで、たくやはええとかああとか答えた。

小テストといって、授業の最終15分くらいでやるテストも満点だった。

やればできるんだって思えたら、勉強が樂しいことまでは言わないまでもやってもいいかなと思つようになつた。

「その調子で頑張れ」

と先生に、たくやは言われて氣を引き締めた。

授業後は文化祭のしたくをする生徒が多少残る。

「お~い」

舞と昇が来る。

「今日は一緒に帰ろう」

「わかった」

「あおいは？」

「あおいちゃんも来るよ」

たくやはあおいがとても大切だつたが、それを全面に押し出すような人間ではない。舞と昇のように普段から手をつないで遊びに行つたりする仲にはなかなかなれそうになかった。

「恥ずかしくないのか」

とふいにたくやは聞こへしまへ。

「何が？」

「いや、手をつないで帰るの」

「どうしたことなによ。舞ちやんが他の人に取られなによ」
かり手を繋ぐんだ

と、昇は言ひ。

舞は嬉しそうに手をつないでいる。

「まあ、お互いがいいならいいけど」

どうにもあつあつでたくやは逃げられないままへ。

「あ、きたきた」

「おまたせしました」

あおいがそう言ひ。

「ちょっと分からなこと」を先生に聞こてきた。今日宿題出でな

いし早く帰る

「そうなの」

「うん」

「あおこちゃんでもわからないうつはあるんだ

「あるだろそりゃ」

とたくや。

「あります

ときつぱりあおこが言ひ。

「勉強でも人生でもわからないことだらけ」

とあおいが答えると、そんなもんだと全員で納得して帰る。

それなりに充実した日々に、闇がそろつと寄つてくれる。
そんなことをケイが思つ。

「どうしたんですか」

「ん」

「楽しそうです」

「ああ、俺はもめ」とが好きだからな

「悪趣味ですね」

「まあな

「何か起こうじそうでわくわくしますか」「そうだな」

レインはケイの発言をとがめない。

「何が来るとしても」

「はい」

「この命がつきたとしても」

それはそれでいいと俺は思う。とケイは言った。

「ケイ、あなたは」

「なんだ」

「鬼でなくなつたことを後悔してませんか」とレインは言った。

「お前と同じ血線でものが見たくなつたんだ。死んでもまた生まれ変わるものという種族にまた戻りたくなつた。それだけだ」「そうですか」

「ああ、お前が気に病むことじやない」とケイは言いきつた。

「ちょっと見てきますね」

「何を」

「札です。結界を張り直しているんですよ」

レインは言いながら札を出す。

「寺の結界がああも簡単に破られるとは思わなかつたな」

「ええ。それで」

「なんだ」

「ちょっとこれを預かってください」と竹筒を差し出す。

「苦手なんだがな」

「すみません。ほかに頼める人いないですし

と、狐の入った竹筒を受け取つてケイが黙つてそれを横にした。キッネは、レインのパートナーであるケイを父親だと思いだしているらしく。それなりにケイにもなついている。

「名前とかつけてやらないのか」

「返す時に情が移るからつけたくないですね」

言いつつ部屋を出ていくレイン。

「もうちょっと待つてろ、すぐ帰つてくるからレインは」

と顔を出した子狐に声をかけてやる。

あぐらをかいたケイの足に頭をのせて、くつくつ寝始める。

「道成寺」

「はい」

「笑いたいなら笑つていいいぞ」

「すみません」

ケイの影で笑いをこらえている道成寺にケイは言つ。

道成寺と旅をしていたころ、管使いの男に会つた。名前は覚えていない。

ケイはその男と戦つたが、殺すつもりはなかつた。

その時、使つていたのは大きな狐だったが、懷から出た竹筒から子狐が出てきて懐に飛び込んできて、どこといわず噛まれた。で、あざだらけになつて逃げたのだ。

「あのときは散々な目にあつたな」

と呟く。

寝ている子狐は本当に安心しきつて眠つている。少しまだおつかなびつくりだが、ケイはこの小さな動物靈をかわいいと思うようになつていた。

子供ができたらこんな感じなんだろうか。とケイは思つ。作るとしたらレインとだが。と考えて顔を赤くする。

道成寺はひとしきり笑つたあと影に戻つていつた。

「いつまでこうしておけばいいんだ」

とケイがつぶやいた。

第四部（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

第五節（温査也）

がよひと聞こですが、一瞬に置きもか。じるじして読んでください。

「ただいま～」

「おじゃまします」

今日は舞の家で勉強会をすることにした。テストが近いのだ。

「お帰りなさい」

お手伝いさんが言つてくれる。舞の母親は離れて祈祷でもしているのだと舞が言つ。

リビングの机で全員宿題を始める。まず宿題をやって、それからテストの勉強だ。

あおいは黙々と宿題をやつていて。あおいはテストが割と好きだ。勉強してきたことを出しきて答えていく時間。スリリングだと思う。授業よりも何倍も好きだといつ。舞はそんなものかしらと思いつ。

「ん

とたくやがつぶやく。

同時にあおいにも何かが感じられた。メガネをはずす。

「祈祷所から何か出てきたみたい」

と舞が言つて立ち上がる。宿題どころではない。

「ちょっと見てくる

「僕も行くよ」

「みんなで行つたほうがいいかもしない

眼鏡をしたあおいが変だと感じるほどの異変だ。

「行こう」「

たくやが言つた。

祈祷所といつても小さなプレハブの家が建っているだけだ。

「お母さん」

舞が叫んで中に入り動けなくなる。

黒い穴が空間にあいていて、太い赤い手が舞の母親の腕を掴んでいた。

あおいが飛び込んで矛を突き刺すと、手が離れた。

「おばさんこっちへ」

たくやが飛び込んで舞の母親を引き寄せせる。

昇が弓をひきしほり、黒い空間に打ち込んだ。

黒い空間が消えていく。

「大丈夫ですか」

「ええ、大丈夫」

「お母さん」

舞が母親に抱きつく。

「ありがとうございます」

全員で息を撫でおろした。

「今のはなんだつたんだ」

たくやは言つ。

「心あたりはありますか」

あおいが舞の母親に聞く。

「除霊を頼まれてる人の背後を覗いていたの。そうしたら急に手が出てきて」

舞が動かなくなつた。

「どうしたの舞」

がたがたと震えている。

「なんかおかしいよ、こー出たほうがいい」

昇が言う。全員そうだなど出る。

外に出ると、風が吹いていた。生臭い風だ。

「あれは」

あおいが見た少年が庭に立っていた。

「知ってるのか」

「知ってるっていうか一回授業中に接觸してきた子」

「みなさんこんこちは」

少年は言った。

「お前何をたくさんでる」

「たくさんなんて滅相もない」

たくやの言葉に少年は笑う。

「ただ僕はコートピアを作りたいだけだ。僕の。僕だけの
くすくすと笑う。

「コートピア」

ぐるりとこの子と昇が小さく囁く。

「だから邪魔なものは全部消そつと思つてる」

「だからここを襲つたのか」

「手始めにね」

プレハブの建物がぐしゃりと音をたててつぶれた。

「お母さんは下がつてて」

と舞が言い、立ちふさがる。

「ああ。壊してしまつたね」

と少年は呟く。

「人間業じゃないな」

とたくやが言う。

少年はにたりと笑つた。

彼の正体を見極めようと舞が力を使う。

「人として生まれて人として扱われなかつた者」

と呟く。

「そんなものはただの僕の過去だ」

少年は言つ。

「かわいそう」

と舞がつぶやく。

「かわいそうだと

少年は笑つ。

舞がぼろぼろと涙をこぼし泣き出した。

「大丈夫舞ちゃん」

「うん」

「僕は人間なんてどうでもいい」

お母さん僕を愛して。

「僕は僕の世界を作るんだ」

お母さん、ぼくを見て。僕に気づこう。あおいにもはつき聞こえた。

あおいが矛を持った。

「来る」

波動を感じる。また鬼だ。

「なんでこんなに鬼が」

たくやは言つ。

「この子が作ったんだわ」

と舞が言つ。

かわいそつ。

とも言つ。

「同情なんていらないね。僕は僕が生きたいように生きるだけさ」

強い怒りと悲しみしかない。

そんな波動に毎日さらされていれば心は暗く閉ざされてしまう。

「この子、まだ生きてるんだ」

「生きてる?」

「うん急がなきや」

舞が言つ。

少年の姿がかき消える。

「まずはでもこの鬼をなんとかしなきゃね」

「そうだな」

あおいの言葉にたくやが答える。

穴から出てきた鬼に対峙する。穴が消えた。

「いぐぞ」

舞が、母親の近くに避難する。

たくやは呪文を唱え、あおいが矛を突き立て、昇が弓を引く。

「やつたか」

鬼が倒れて、黒い塊になつて、やがてむらむらと消えていく。

「早く行かなきや」

「舞」

「舞ちやん」

「どにに?」

とあおいが聞く。

「あの子、まだ生きてるの。母親にぐるぐるに縛られて家に転がされてるのが見えた」

「なんだって」

「たぶん幽体離脱のできる力の強い子なんだと思つ」

生き靈は消すことはできない。

「早く行つてあげなきや、死んじやう。死んじやつたらもつと大きな力になつちやう」

舞が詰ひ。

「急ごう」

「どう行けばいいかわかる?」

舞の母親が言った。

「車いるなら出すわ

と言ひ。

「ありがとうお母さん」

方向がわかるから、大体大丈夫だと思ひ。

「急ごう」

全員が車に乗り込む。

「あそ」

「マンションの一角を舞が指さす。

うわ。たくやが思わず言つ。黒い瘴気が見えるのだ。

「あんなところに人がいるの？」

「あおいが言つ。

「うん」

「まず俺が瘴気を払つ」

とたくやが呪文を唱え始める。

黒い霧のような瘴気が、薄れる。

「中に入がいるみたいだ」

「すみません」

チャイムを鳴らすと女人の人が出てきた。

「なんですか」

昇がすきをついて中に入る。

「右の部屋！」

舞が叫ぶ。

「あなたたちなんですか」

「うわ」

少年が黒い瘴気をまとつて、ビールひもでぐるぐるに巻かれて転がっていた。

骨と皮しかない。生きているのが不思議なくらいだ。

「大丈夫」

今助けてあげる。と言つと、少年はつづらな顔をして舞を見た。

「出でいってちょうだい！」

母親らしき女が叫んでいるが、自分がしたことがどんなことなんか分かっていないのだろう。警察と救急車。

と舞が叫ぶ。

電話にたくやが飛びついた。

「もう大丈夫」

キッチンにあつたはさみでビールひもを切りながら、舞が繰り

返す。

「大丈夫。大丈夫」

あおいには母親がいない。父親もいない。でもこんな親でなくて良かつたとは思う。たまに孤児院に先生を訪ねことがある。あおいは捨てられていた。警察でも親を探してくれたそうだが、未だに実の親には会つたことがない。こんな親ならいつそいないほうがいいだろう。とも思つ。なぜ自分の産んだ子供にこうすることをしてしまうのか。

「救急車も呼ぼう」

昇が言う。たくやがかけはじめる。

「たぶんもう限界よ、水飲める？」

水道で水を汲んでくる。少年はゆっくりと飲んだ。

母親らしき女は座つたまま放心したようにぼんやり畠を見ている。

警察にどうやって説明すればいいのかわからないので、少年の母親を今度はしばって、下の駐車場で警察と救急車がくるのを見ていた。救急隊が部屋に入つていき、警察も向かうのを見届けて、5人はそこを出た。

「昼の番組とかでまた虐待のニュースが出るわ

と舞の母親がつぶやく。

「とりあえず助かればいいが」

「うん」

少年が命を取り留めても、その後ろで何が起きているのかわからぬい。

舞の家まで来ると、少年が立つていた。

「もう体に戻る」

と少年は言った。

「あなたにコートピアを吹き込んだのは誰？」

あおいは言う。

いくら力が強いとはいえ、誰の力も借りずに鬼を作り出せるはずがない。鬼を作るのは簡単なことじゃないのだ。

「わからない」

少年は言つ。

「あなたたちに助けられたのは礼を言つ」

少年の後ろから光が包み込み、言つ。

「お父さん」

少年の父親だつたらしい。

「お父さんは亡くなつてゐるのね」

舞が言つた。

「うん」

「さみしい？」

「うん」

「お母さんもさみしかつたんだろうと思つ」

子供は虐待されていても親のことをかばつ。親は、自分が幸せでないと、子供が親より幸せになると攻撃するようになる。それが虐待だ。子供は親より幸せになるとひどいことをやれることに気づいて、一生懸命不幸にならうとする。不幸の循環は止まらない。

「どうしようね」

体に戻るといつことまゝ、一命は取り留めたと思つていいだらう。舞の家に戻つてきて言つ。

「壊れたものは仕方ないわ」

フレハブの家はペシャンこになつてゐる。上から何かが落ちてきただよ的な壊れ方だ。

「説明に困るけど、でも業者に入つてもらひしきないわ」と舞の母親は言つた。

「今日はみんなで宿題とテスト勉強のつもりだつたんだけど」と舞が言つ。

「いいわよ、勉強してて」

もう出ないでしょ鬼も。と言いつつ舞の母親がため息をついた。

「大事なものは置いてないから大丈夫だけど。まさかこんな大型の攻撃を受けるとは思わなかつたわね」

と呟き、よし。と言ひ。

「お茶が入りましたよ」

と、騒動を知らずにいたのだろう、お手伝いさんがドーナツと紅茶のセットを持って現れた。

「お茶にする？」

舞の母親が笑う。

「私の分もあるかしら」

「奥様の分もありますよ」

初老のお手伝いさんの手作りドーナツだ。

「食べましょひ」

と舞が言ひ。

「そうね」

と母親も言つた。全員でテーブル席に座つて紅茶とドーナツを頂いた。

「勉強がんばつてくださいね」

とお手伝いさんが言い、全員ではいとそれぞれ返事した。

「私も頑張らなきや。とりあえず業者を呼ばないとね」

と舞の母親が言いながら立ちあがつた。

「階さんはゆつくりお茶しててね」

と言いつつ部屋を後にした。

と母親も言つた。全員でテーブル席に座つて紅茶とドーナツを頂いた。

「なんだと思ひ？　あおい」

「なにが」

「今回の事件の発端」

「ちょっと考えたけど、私もはつきりした答えは分からぬ」とあおいが答えた。

帰り道。夕暮れで赤く染まつた空を見上げてたくやが聞く。

「今考へてるところまででいいんだ。考へを聞かせてほしご

「うん」

と言つて考へ始める。

「まず、しのぶさんが急に刀を作つた」と

「ああ、そういうえばおやじさんのところに変なのが来てたな」

「そうなの」

「ああ」

「じゃあそれも考へに入れないと。どんな変なのが来つたの?」

聞かれてたくやが説明する。

「ふうん」

「で、刀は靈力の高いケイさんが持つことになつた」

「うん」

「呼び水の靈氣は妖怪を閉じ込めることで作つてゐる。その妖怪たちが全部いなくなつてしまつてもケイさんなら刀を維持できる」

「うん」

「で、次に鬼」

「そう。鬼」

たくやもあおいも鬼に対峙したのは、道成寺との模擬戦くらいだつた。

「鬼をつくつていたのがあの少年なのかしら」

「そうじゃないのか」

「鬼を作るには儀式が必要だし時間もかかる」

「そうだな」

「でも私のところに出た少年はいくらでも作れると言つてこた

「うん」

「だからたぶん大きな何かが動いてるのだと思つ」

「何か?」

「うん、何か。私にも分からぬ」

あおいが言つた。

「何が動いているんだろうな」

二人は顔を見合せた。

「たくや」

「ん」

「じのぶさん」にさわると話を聞いたほうがいいかもしない」「そうだな」

「お母さんのことは知ってる?」

「ああ、教えてもらつた。お前は知っていたのか」

「たくやのお母さんの浄化を手伝つたことがあるから知ってる」

「浄化?」

「うん。妖怪に食べられた人は普通には成仏できないの。それでその妖怪からたくさんの靈を引きはがしたことがあるから知つて」

とあおいが答える。

「そうか、ありがと」

「ううん。本当はたくやにやつてもうこたかつたんだと思ひナビ」

「うそ」

「たくやはその辺山籠りしてたから」とあおいが言つ。

「ずっと言わないでおいてくれつて言われてたけど、もひつもひつともいいと思つたから」

「ああ」

「ずっとお母さん、たくやのこと見てる」

「そうか」

「でも、その妖怪は退治できたわけじゃないの」

「ああ、それは聞いた。封印していられるだけだつて」

一人は黙つてゐる。

「親父は何考へてるのか俺にはさっぱりわからない」

「もつと会話したほうがいいかも」

「そうなんだよな、なんかまだ隠してることつぱりあつそつなんだよな」

とたくやがため息をつく。

「何にせよ帰つてからレインはたちにも今日のことが言つたまうがいいし」

「ああ」

一人はそれから特に会話もなく帰つた。

「大変でしたね」

トレインは言つ。テレビでは少年が母親に監禁されていたところコースが流れていた。

「そうでもないけど。でも、何かが動いてるという感じがあるの」

「そうですね。ケイもそう言つてました」

トレインは言つ。ケイはそれが楽しいようだったが、そのことはふせておく。

「ただいま」

と声がした。しのぶだ。

「親父、ちょっと話があるから集まってくれ」

「わかった」

しのぶは何をしてきたのか、いつもは着物を着ているのだが出ていくときはそういうえばジーンズにトランクだつたなどたくやはどうでもいいことを思い出す。

「お帰りなさい」

あおいが言つ。

「話とは」

「今日舞のところに鬼が出た」

とたくやが言つた。

「やうか」

としのぶは言つ。

「親父は何か知らないか」

しのぶは腕を組む。

「もう話したほうがいいか」

ケイくんも呼びなさい。とレインに言つ。

「昇君と舞さんにも明日言つておくよつこしてもらえるか」

「はい」

あおいが答える。

「まずはじまりの話しからするか」

いつのころの話なのかはしのぶも知らない。鬼と人どが共存していたころの話だとは聞いていた。

ひとりの鬼がいたという。

「ケイさんみたいな？」

「そうだな、ケイくんや、道成寺さんのような鬼や鬼だった人が普通にいた時代だ」

「その鬼が一人の妖怪を好きになつた」

「うん」

「その妖怪の女を、鬼はさらつて妻にした」

だが、女は鬼を嫌つていた。

「そこで女が自分を好きになるように、鬼は頑張つた。だが、女は他の男を連れ込み、鬼はその男を毎日殺した」

「ひどい話だ」

たくやは言う。

「男があきらめるか、女が観念するかどちらかしかなかつた」

その一人をある寺の住職が封印した。

「その寺がうちの寺だ」

としのぶが言う。

「じゃあその一人がここに封印されているのか」

「そうだ。それを狙う鬼もいるようだな。鬼は力の強い鬼を取り込み同化することで強くなる」

と外から声がした。

「ケイさん」

「レインさん」

「二人が立っていた。

「知つてたんですか」

あおいが聞く。

「いや、ここがそつだとは知らなかつたが、そつこつ寺がある」とは知つていた

ケイは答える。

「寺の真ん中に大きな封印を感じましたが、まさかそんなことだとは思いませんでした」

とレインが答える。

「寺にいくつか封印があつて、何重にもなつてゐるといふがあるナビ、それですか」

とあおいが言ひ。

「そうだ」

としのぶが答える。

「刀はその鬼と妖怪を退治するために作られたものだつた。ところがそれを持つて刀鍛冶が行方不明になつた」としのぶが言ひ。

「その刀がどうこつわけか今見つかつた

「どこから

「寺の中からだ」

書置きがあつた。鬼と妖怪を退治する時に失敗した時が怖いから逃げると書かれていた。刀はここに置いておくと。

「それ、誰も見つけてなかつたんですか」

レインがあきれたりとくに言ひ。

「いや、見つけた人はいたんじゃないかな。刀は使われた形跡があつたからな」

ケイが言ひ。

「使つてはここに隠していたんじやないかとわしも思つ」としのぶは言ひ。

「刀で辻切りを繰り返した者がいるようだ」

「辻切り?」

「通行人を切り殺すことよ」

とあおいが言つた。

「うわ」

「靈がついていてそれを淨化するためにしばらく経をあげていた」としのぶが言つと、たくやは気づかなかつたといふ。

「毎日読経してゐるあとは思つてたけど」

と言いつつ正座を崩し、あぐらをかく。

靈がいなくなつてから、刀を直した。

としのぶは言つ。

「それから。たくやの母親のことだが」

「ああ」

「わしは普通の会社に勤めていた。寺を継ぐのがいやで逃げ回つてやつと好きな人もできて一緒に暮らし始めて、幸せな家庭だったと思つ。たくやが生まれて、一歳の時だ」

「ああ」

「妖怪が来た。わしに流れる血を知つた妖怪が」

「それで」

「ああ、妻は殺されて食べられた。たくやをかばつてこと切れいでいた」

ひどい状態だった。としのぶは静かに言つた。

「それから寺に戻つて寺を継いだ」

何年もかけてその時の妖怪を5つに分けて封印した。としのぶは言つ。

「私が手伝つたのはその時ですね」

トレインが言つ。

「大量に札を書いてもらつた」

「ええ」

「そしてそのあとひとつ一つの封印を解いて、妖怪から靈を引きはがし

て浄化した

「その時はあおいさんも手伝ってましたね」

「ああ」

「俺は何も知らねえ

とたくやは言つ。

「たくやはその時まだ力が足りなかつたし見なくて良かつたと思つよ

と、あおいが言つ。

「何を見たんだ」

「ぐちゃぐちゃになつた人の死体」

「あおいさんはもう見てしまいましたからねえ」

「わしもああいう状態だとはおもわなくてな。すまなかつた」

「いえ、私は別になれてるんですけど」

あおいは言った。

あおいはいろんな靈をはらつている。飛び降り自殺の靈なんかが
浄化される前とかは本当に悲惨だ。

「それで、その妖怪と、一体のもともとある妖怪と、三体いるわけ
だな」

とたくやが言つ。

「そういうこと」

「そのうち、5つに分けた妖怪はこの裏山に封印してあるんだが、
封印を解いて浄化させてしまおうつかと思つてゐる」

「まずはそこからですね」

「その妖怪の力を得れば大きな力になると思ってるのがたぶんいる
な」

とケイがつぶやく。

「ケイ」

「ああ、分かつてゐる。不安になればそこを突かれる」

ケイが続ける。

「でも用心はしつべべきだね」たぶん、山の方の妖怪を浄化して

る間に寺に来る可能性もある

ケイの言葉に

「もともと寺にいる妖怪と鬼は大丈夫なのか」

「たくやがしのぶに聞く。

「そつちはレインさんに札を書いてもらつてこる」

「じゃあとりあえずは大丈夫なんだな」

と言つととりあえず安心はしたようだ。

「寺を守るのは俺がやる。のために刀を預かつたところとな
んだらうからな」

ケイが言つ。

「私は結界をはずす仕事があります。山の方に向かいます」

「頼んだぞ」

打ち合わせを済ませる。

「じゃあ、明日昇君と舞ちゃんには説明しておきます
とあおいが言つ。

「黒幕が出てくる」

とケイが言つ。

「たぶん、これが正念場だ」

としおぶが言つ。

「寺に封印をれてるほつの妖怪と鬼の浄化は難しいんじゃないんで
すか」

「ああ、多くの命をまとつて攻撃することができないからな
あおいでも無理か」

「何百どころ靈がくつついても離れない状態なんですよ」

札を貼るときに見ましたが。とレインが言つ。

「少しずつ浄化していくばあと数百年で浄化できるとは思つが
とケイが言つ。

「何にせよ厄介ですね」

あおいが言つ。

「刀で切るのも大変そうだな」

ケイが言つ。

「昇君と舞ちゃんはどこのポジションでやつしやがつですか」

「日のぼうだ」

「ケイさん一人で大丈夫ですか」

「あおいが聞いた。」

「俺は大丈夫だ。道成寺もいる」

ケーンとレインの腰からぶら下げる竹筒からも声がして小さな狐が出てくる。

「きつねは寺のまつに置いていくか」

「そうですね」

「ケイくんと留守番だよ」

あおいが言いながらきつねをなでてやる。

「かわいい」

「では解散といつ」とド

「日曜日に決行する」

としおぶが言つた。

日曜日はくもひとつない晴天だった。
裏山に上がる。

「気持ちのいい日ですね」

「こんなことでなければ」

とあおいが言つ。

「そうね」

と舞が答える。

「まず一番先にここ」の封印を解く
と、しのぶが地図を広げた。

「しめ縄が張つてある」

とたくやが言つ。

「結界を切ります」

レインが言つて先頭に立つ。

複雑な印を結んだあと、大きく声を出した。

ぶつんと繩が切れた。

「じうじうと空気が動く。

「来る」

「あおいが言'う。

「5つに分けたつてじうじう風に分かれてるの」

舞が言う。

「みればわかるよ」

「あおいが言」つつ矛を構えた。

黒い気体のようなものが立つて、もやもやとなつたあと男の姿になつた。

目がひとつだ。

「完全でないから、少しずつ欠けた姿になつて現れるの」

あおいが言いながら矛を構えた。

舞が後ろに下がり、レインとともにレインの張つた結界に入る。

しのぶとたくやが呪文を唱え始め、昇が弓を引いた。

昇の弓が数本の矢を矢継ぎ早に打ちこんでいく。早い。

妖怪は動きもせずにそこに立つていた。

「反撃はしないのかな」

昇が言つたその時だった。

目を閉じていた妖怪が目を開ける。

また風が吹いて、矢が抜けて落ちた。

矛でできた傷からは血の一滴も出ず、妖怪はにたりと笑う。

「ひるむな」

しのぶが言'う。

「持久戦があ」

昇が言いつつもう一本弓を引く。また妖怪が目を閉じじよ'うとしているところに目を狙つて昇が矢を射る。

「ぎゃああああ」

「田が弱点だつたんだ」

とたくやが言いながらぼうきりと崩れしていく妖怪に声を止めた。

「そりなんだ」

「じゃあ前に封印を解いて浄化した一体も弱点があつたのかな」
あおいが言つ。

「がむしゃらに攻撃してましたからねえ」
レインが結界を解いて言つ。

「何にせよこんなのがあつて3体あるのか」

「ああそうだ」

しのぶが答えた。

たくやがうなざつしたように声を上げる。

「形も違いますね」

「ああ」

次の結界に向かつ。

「ここですね」

レインが結界を取ると、今度は片手のない着物の少女が立つてい
た。

「子供」

と昇が言つが、あおいが先に動いた。

「急いで、昇君」

舞が言つ。

「うん」

弓を引き絞り、手を離す。

矢が少女の胸のあたりに突き刺さる。じゅ。と音がして矢が溶け
る。

「きつがない」

言いつつまた弓を構えた。

そのころケイは静かに本堂に道成寺とともに座っていた。刀を横

に置き、精神を統一する。

「そろそろ来る気がするなあ」

とつぶやくとふところに狐の竹筒を入れる。

「何かあつたらレインのところに走るんだぞ」と狐に言い聞かせつつ草鞋を履いた。

空はどこまでも澄んで青い。雲ひとつない空だ。

「こんなことで死ぬようなことはないと思うが、道成寺」「はい」

「俺が死んだらあとは頼んだぞ」

「不吉なことを」

「いや、まあ本気でかかつてもダメかもしれないからなあ」

何者が来るか分からぬのだ。

「どちらにしろ寺を任せられたんだ、俺たちはここで番をするしかな

い」

言つていると、風がふき始めた。

「来ましたね」

と道成寺が静かに言つ。

一人は立ち上がつた。

二人が対峙したのは一人の女だつた。

「お前は」

「お久しぶりですわ。ケイ様」

女はそう言つた。

結界がきしみ、力を失う。

「鬼が来るとは思つていたが」

「道成寺様もお久しぶりですわね」

と言いつつ女の額から角が生え、牙が口から生える。

「結界を解いて解放した力を得ようという魂胆だらう」とケイは低く言つ。

図星だろう。女は低く笑つた。

「そこまでわかつていらつしゃるなら、いなくなつてください」と

れしいわ」

「昔の俺ならな

ケイもまた笑った。

「鬼の集団を作ったのもお前たちか」

「ええ、逃亡者のケイ」

「鬼の里とはもう縁を切つた。逃亡者と言われようと反逆者と言わ
れようと一向に構わないが」

お前こそ人間の男と駆け落ちしたんじゃなかつたのかとケイが言
うと、女はすいと真顔に戻る。ケイはもう鬼ではない。鬼の里には
関係なくなつたのだ。

「お前は鬼のままだつたんだな」

「ケイがつぶやいた。

「人間など、くずだわ」

女の手にはナイフが握られていた。

ケイは刀を抜いた。

「人間に戻つたあなたにはわからない」

「ああ、わからなくていい。里が怖くて鬼から人間になれなかつた
のだろう」

ケイは言いつつ構える。

「下がつていろ」

道成寺にそう語つ。

「俺はもう過去は振り返らない」

「そのようですね。戦う以外ないのですわ」
笑う。

女の顔は美しかつた。

人間に戻つて、守るものが増えた。年をとつていくことにはなか
なか慣れないが、悪くないと思えるようになつた。レインのおかげ
だ。

「同じ目線に立ちたい人間ができただけだ」

「私は鬼であることを捨てない」

「それもいいだろ？」「

ケイは言う。刀をすらりと抜いた。構える。

女は走り込んでくる。懐に飛び込まれる前に刀を振り下ろす。ナイフで女が刀を受ける。力では五分五分だろ？ 鬼であつたころなら間違いなく勝てた相手だ。

ふ。と女は笑った。

「女のために弱くなりましたわね」

「ああ。でも後悔はしていない」

もともと優男の風情だ。後ろに下がるとナイフが滑る。その瞬間に刀を返し切りつける。

腹のあたりを切つた。

返り血がケイの顔に飛ぶ。

「まだまだ」

と女は言つ。痛みを感じているはずだ。

ケイのふところから飛び出した子狐が女の顔に青い火を噴いた。振り払う。

「つ

やけどをしたところがどうと溶けてくる。

「よくやつた」

ケイが言つ。

「目が、田が見えない」

女はそう言いながらよろよろと歩きだす。

「お前は俺を殺せない」

「なぜ」

「お前は今迷いがある」

「そんなものとうに捨てた」

「いや、捨ててない。好きだった男をふりきれていない」

「やめて」

「やめない。俺は命をかけて好きな女とともに生きる選択をした」
だが強くなれる関係でない恋愛など恋愛と呼べない。ケイは肉体

的には弱くなつたが、精神的には強くなつたと自分でも思つ。人間であること。

鬼をやめたこと。

ケイが人間であつても鬼であつてもレインは変わらないだろうが。人は強い。そして弱い。

「俺は後悔していない」

「何がわかるあなたに。私は死ぬのが怖かった」

鬼であれば生き続けられる。

「でもあの人気がいなくなつた時、死ねばよかつたと思つた」

そう言うと、ふらふらと歩きだす。

ケイはまた切りつけた。

女はひざをつくと、ごぼりと血を吐いた。死者から作られた鬼は浄化することもできるが、もともといる鬼はそういうわけにはいかない。永遠の命を持つ存在だ。

「私は殺せないわ」

「わかつていい」

女を切れないという男は多いが、ケイはその点平等だった。男も女も切るときは切る。

女はふいに黒い穴に吸い込まれていった。

ケイは生きたまま鬼になつた。稀有なそんざいだった。鬼の里には鬼に連れていかれたが、肌に合わず、一人で生きているときに道成寺を助けた。それから道成寺は死んでからも鬼になつてあなたと一緒に生きたいと言い、今の形になつた。

「道成寺」

「はい」

「次が来る」

「はい」

「なんとかレインたちが来るまで持ちこたえてみせる」

刀を使うほどに体の中で煮えたぎるものがある。戦うこととは生きること。そう思つ。

「行くぞ」

二人が立つ前に、また新しく影が下りてきた。

レインはふいに何か分からぬ不安に襲われた。
「この結界が外れたら、先に下山していいですか」

「どうした」

しのぶが言う。

「ケイになにかあつた気がするんです」

「行つたほうがいいよ」

舞が言う。

「こつちは人数足りてるからな
たくやが言う。」

「ケイ」

とレインがつぶやき、胸から下げているペンドントを握った。ケイからもらつたものだ。

「最後の結界だ」

「よし」

「いきます」

レインが綱の前に立つた。

「いくよ」

『』をひきしづり、息をあらく吐きながら昇は言つ。最後の敵は片腕がなかつた。

レインが急いで山を降りた。

「ケイ」

寺について走る。

結界が破れている。ケイは？ とみれば、大きな鬼と戦つていた。

レインは札を投げる。

「燃える」

と叫ぶと鬼に向かつて投げる。

鬼が火に包まれながら何かを叫ぶ。もともと人間だった鬼。魂は人間だ。何か言いたいのかも知れないが、いちいちそんなことを考えていたらこんなことできない。

ケイが後ろに逃げる。

「レイン」

「大丈夫ですか」

「大丈夫と言いたいところだが、危なかつたな」

「良かつた」

「次がまた来るぞ」

「みんながすぐに来ますから、それまで応戦します」

「奥の結界を狙つてるらしいな、複数来たら封印が解けてしまう可能性もある」

「そんなことさせません」

「ああ」

道成寺が構えた。ケイもかまえる。

レインが次の札をジャケットの内ポケットから出す。

「今封印が解けたらどうなるんだろうな」

ケイは言つ。

「試してみるのはやめてください」

「しないさ」

ケイは言いつつ次の黒い六があくのを見ていた。

「レイン」

「はい」

「俺はずつと戦ってきた。これからも戦つ」

「はい」

レインは答へながら六が広がつてまた鬼が現れるのを見る。

「奥の結界付近には近寄れないみたいだな」

「奥の結界は私もうかつに近寄れないほど強い結界です」

「お前でも無理か」

「ええ、私が半年かかつてもやりおおせるか分からないよつの結界ですね」

「そうか」

ケイは唇を舌で濡らした。

「楽しいな」

ふと笑う。

「悪趣味ですか」

「悪趣味です」

道成寺とレインに同時にツツコまれてケイが黙る。

「いいじゃないか」

刀を振り上げて言う。

「こういう場面でなければ俺は生きている気がしないんだから」と言いながら切り下げる。

鬼の左腕が切り落とされる。

「だんだん要領がつかめてきたな」

試し切りのついでのようだ。

「刀が馴染んできましたな」

道成寺が言いつつ一步前に出た。

右腕をつかんでぐん。と振り回す。壁に激突させるが、鬼は数度頭を振つただけで起き上がりてくる。

レインが札一枚投げた。

「切断」

とひとこと言つと札は横になり、刃物に変わつた。鬼の首の半分あたりまで切る。

「切りおおせないか」

ケイが言つ。

鬼は、動きが人間より緩慢な者が多い。その代わりに耐久力があるのだ。

その鬼は緑色の肌をしていて、血は真っ黒だった。ぶしゅうと吹

く。腐臭にケイが顔を覆う。

今までの鬼とは違うなとケイが感じる。

「術が未熟になつてゐるな」と呟く。

「どういふことですか」

レインが言う。

「これは死体を使った鬼だが普通鬼になると腐らなくなるんだ」
生きたまま鬼になつたケイとは違い、死体を使った鬼は、死んだ身体に適当な魂か、もともとの魂を入れてつくられる。

「おかしいな」

ケイがそれでも刀を水平に持ち、襲いかかってくる鬼を切り結んだ。

ぼろぼろと空氣に溶けていく。

「消えたか」

ケイが黙つて刀を納めた。

「大丈夫でしたか」

あおいたちが戻つてきたのだ。

「大丈夫だ」

結界が一部破れてしまふが。

全員が戻つてくる。

「なんかにおいがまだ漂つてるような気がしますね」

レインが言う。

強烈においだつたのだ。

「検討する必要があるな」

ケイは言う。

「山の妖怪は全部退治したよ」

昇が言う。

目の下に隈ができる、憔悴してるのがわかる。

「少し眠つたほうがいい」

ケイが言った。

「弓」と矢は昇君の力で出てきているものだ

「帰つても大丈夫ですか」

舞が言つ。

「次の鬼が出てくるまで時間がありそつだからな」「どうしてわかるんです」

「不完全な鬼を出してくるといつ」とは鬼を作り出すなかが壊れたか不完全なんだ

「そういうことですか」

レインが言いつづれを一枚出す。

「これを持って行ってください」

「これは」

「もし昇君がひとりで鬼に会うようなことがあつたとき、守つてくれるものです。もし出でたらこれを投げて、逃げてきてください」「わかつた」

「これが舞さんの分」

「ありがとうございます」「

もうあたりはうす暗くなつている。

「大丈夫」

あおいが言つた。

「うん」

全員が解散する。

「夜中に襲われたりしないよな」

「もし襲われても俺が起きてる。全員たたき起しや」

ケイが言つ。

「ケイ、また夜更かしするつもりですか」

「この騒ぎで本が読めてないんだ。読む」

レインに言われても、本を読むことだけは優先するケイである。

「じゃあお休みなさい」

舞が言つ。

「気をつけて帰れよ」

たくやが言った。

夜のことだ。

「ケイ」

「なんだ」

レインがケイの部屋を訪ねた。

「ここ」の寺の結界のことと不審な点があります」

レインが言ひ。

「不審な点？」

「ええ」

本を閉じて、ケイが聞く。

「どんな」

「具体的にはうまく言えないのですが。外側の結界は私が知っている結界ですが、その奥の結界は日本の中のものではないような気がするんです」

「日本のものではない？」

「ええ」

レインは直感でものをいうことがあり。大概それは当たっている。「夢を頻繁に見て、夢の中で学習している時があります」

「ああ」

レインの夢は、過去とつながっているのだとレインは言ひ。

「お前は前世で符術師だったからな」

「ええ。そのころの記憶が浮かんでくるのでしょうか」

日本で作られる札のたぐいなら、大体看破できるのだが。

「中国のものかもしれないです」

「中国か」

「ええ」

レインは言ひ。

「あと結界を複数の人間が狙つてるとんじやないかなとも思いました」

「それは俺も思う」

「今日山に行つて、いる間に何がありました？」

「そうだな、まだあまり話してなかつた」

とケイは話はじめる。

「鬼の種類がばらばらなのに気になりますね」

とレイン。

「やはりごくつか違うところから鬼をここに送りこんでいるような気がします」

「俺は鬼になるとき、いろんなものを失つていて、飢餓状態で、生きているのもやつとなどこうだった」

「ええ」

「そこで、一人の鬼に会つて、鬼になる方法を教えてもらつた」

それからその鬼の言つとおりにして鬼になつた。それから数百年。道成寺という連れができる、仕事をするようになり、レインの前世に会つた。

「結界を作るとき」、中国の僧が結界を作つたのではないでしょ
うか

「そういう線もあるな」

「あるいは中国で学んできたものを使つたといつ可能性もあります」

「そうだな」

「何にせよ私には結界を壊すことはできても封印し直すことは不可能だと思います」

「お前でも無理か」

「ええ」

「ちょっと厳しいな」

ケイが腕を組む。

「何重にも張つてある結界を、ひとつずつ壊して、そのたびに出てくる靈を浄化し、最後に鬼と妖怪を浄化して終わりですが」

「言つるのは簡単だが

「ええ」

「結界の中がどうなつてゐるかも分からなからな」

「昇君の体調次第ですね」

「そうだな」

「たくやくんとあおいさんだけでは少し荷が重い」

「俺とお前もいるだろ?」

「私たちがあまり手を貸すのは勉強になりません」

「そういうことか」

「ええ」

「いい機会だつた。実戦で鬼とたたかうことができるのにはこんなことがなればできない。

「でも私たちも出ないと無理なほどひどい状態の可能性もありますしね」

「まあ、あけてみないとわからないといつ」とか

「そうです」

「しかも結界は一つあり、どちらがどちらの結界なのかも分からない。明日には昇君が元気になつて出てきてくれる」と願いましょう」「夜になると出てこないな。鬼

ケイは言つ。レインも疑問に思つていたのだ。
「満月が綺麗ですよ」

「満月か」

「月が明るい日はもののけは出てこないのかも知れません」
「そうかもな」

二人はしばらく満月を眺めていた。

あおいが学校に行くと、元気な昇と舞が來た。

「昇君は大丈夫?」

「大丈夫。一晩寝たらすつきりしたよ」

舞がにこにこしている。

たくやが時間ぎりぎりで教室に入つてくる。

あおいが自分の教室に戻つていく。

補習の授業にとなりのクラスである昇と舞のクラスの教室が使わ
れているのだ。あおいはその少しの時間に舞と昇と多少しゃべつて
自分の教室に戻つていく。

自分のクラスに戻る。

「黒木さん」

「何?」

「あの、たくやくんと仲いいよね」

「はあ」

と答える。仲がいいというか、一緒に暮らしているのだが、知ら
ない生徒も多い。

「この手紙渡してほしいの」

と言られてあおいがいいよと答える。

たくやは人氣があるらしい。あおいはよくわからないのだが。勉
強もできない、スポーツは普通くらい。でもまあ顔立ちは整つて
ほうだけは思うが、ケイほど美男子ではない。でも誰とも友達にな
るようなところはあるなと思う。

女の子とも屈託なくしゃべるし。そこらへんで女の子のほうが舞
い上がってしまうことが多いのだ。渡してはおくが、どうなるかは
分からないとあおいは思う。

別にあおいはたくやと付き合つてているわけではないが。

ちょっと心が揺れる。あおいはたくやが好きだ。舞は知つて
が。ほかの人はそうは思つていなかつだ。

たまに学校でもしゃべることがあるが。一人占めしたいとかそ
ういう感情はない。ただ。ずっと一緒にいたいなとは思う。たくやの
そばにいるのは心地よくて好きだ。

手紙をかばんの中に入れた。

「たくや

「なんだ」

帰つてくるとたくやが整装でどこかに行ってしまった。

「暇?」

「ちょっと買い物に出かけてくるつもりだけどなんだ」

「手紙預かってるの」

「誰から」

「クラスメートの女の子」

言つて渡す。たくやはそれをひらこして、あおこに書い。

「これくれた女の子に、俺には好きな人がいるって書いておいてくれ

れ

「たくやが言い。

「わかった」

あおいが答えた。

好きな人があ。本当にいるのかな。とあおこは思つ。自分のこと
だつたらいいなと少し思つが、そんなことはきっとなこと思つてい
た。

がつかりするだろうな。あの子と思つが。あおこは自分から告
白する勇気はなかつた。失敗るのが怖いとかそんなことじゃなく
て、両想いになるにしろ失恋するにしろ、変化してしまつことが怖
かつたのだった。今は今の幸せがある。とあおこは思い。

「で。来週の日曜日に二つの塔の結界をはずすこととした

とケイがおじそかに告げる。

舞と昇が寺にやつてきていて、そつと離れて姿勢を正す。

「しほさんはじめしばらく留まつますわつだ」

「だから私たちだけでやる」とになります

「どこ行くんだ親父」

「四国巡礼だそうですね」

「こんな時に」

「こんな時だからでしょ！」

トレインは言った。

「これはみなさんに対する試練です」

トレインが言った。

「まあ、俺たちはサポートはするし結果をばすすといつもではやってやれるが、その先は自分たちでなんとかするしかないと pensé」

ケイが言った。

「わかりました」

あおいが言った。

他の面子もうなずいた。

「これは訓練じやない。実戦だ」

「はい」

昇が答える。

「わかった」

たくやも答えた。

「私は……足手まといでしううか」

舞が言った。

全員が言葉を失った。いつもの「ここ」した舞ではない。

「舞ちゃん」

「足手まといなんて」とはないよ。今回の敵はどんな敵か分からない。見抜く力を持つてるのは舞ちゃんだけだ」

昇が言った。

「足でまとい具合からいけば俺だって呪文を全部唱え終わる前に相手が向かってきたり無力でしかないからな」

たくやが言った。

「そうだよ。みんな少しすつ苦手があつても、全員力を合わせていけば大丈夫だよ」

あおいが言った。

「あおいちゃんはでも苦手なんであるの」

「私は力を使うと倒れてしまうから。矛を使つときは力を使うけれど。靈力をじつそり削られると弱くなる」

「それは僕も同じだし」

昇が言つ。

「至近距離からの攻撃ができないし」

あおいが付け足す。

「遠くから狙えるけど攻撃には無防備だからね。僕は」という昇に、舞が抱きついて泣き出す。

不安なのは誰でも同じことだ。思春期の真っただ中にいるということはそういうことだ。とケイが思つ。

「話がまとまつたといひで」

ケイが言つた。

「当日の作戦を練る」

「わかりました」

あおいが言つ。

「まず西側の結界から外す」

「まずひとつめの結界をはずします。たぶんこの結界をはずしたら他の結界は自然にほどけてくると思います」

「ううなんですか」

あおいが聞く。

「はー。内側の結界がゆるくなつたので外から補強してある状態なのが見てとれます。それから。これは私の予測でしかないですが」

「はー」

「中の結界を張つたのは日本人ではありません」

「ううなの」

「中国の僧ではないかと思いますが。誰なのかは分かりません」

「どうして」

「結界の種類が日本のものと違つのです」

妖怪と鬼は中国から渡つてきた可能性があるとレイインが言つ。

「何にせよはずしてみればわかることだが」

大量の靈も一緒に封印されますから。その浄化も必要です。

「じゃあ浄化組と対妖怪、鬼組とわかれたほうがいいな

とたくやが言う。

「俺と道成寺は外からくる鬼に対して攻撃を行う」

ケイが言う。

「たぶん今まで来たのは様子見もあるはずだ。その証拠にしばらく攻撃がない。山に封印された大きかつた妖怪が消えた今結界が外れた時に結界内部の鬼と妖怪を吸収して大きな力にしたいと考えてるやつらがいるんだろうと俺は思う」

と言いつつケイが肩をならした。

「結界は、一番上の結界をはずすのだけは私がやります。あとは自然に壊れてしまうと思うので、そのあとはあおいさんたちにバトンタッチします」

浄化組にたくや、対妖怪と鬼にあおいと昇。と割り振る。

「舞ちゃんは」

「私が結界を張りますから、その中で敵を見据えてください」

レインが言う。

「わかりました」

舞が頷く。

「じゃあ、分かつたら、話は終わりだ。各自、宿題に戻つて」

ケイが言う。

「俺は本の続きをでも読むかな」

ケイが立ち上がる。

「私は夕食のしたくをします」

レインが立つた。

「あおい」

「なに」

「今日の宿題全然わからない」

たくやがさっぱりといつ顔をしてあおいに助けを求める。

「わかった、教えるから
などと言いながら、たくやとあおいと昇と舞は本堂の机で勉強した。

日曜日は快晴だった。早朝からしのぶは荷物を持って出て行った。
レインがそれを見送った。息子のたくやはまだ寝っているだらう。

「では頼んだ」

「はい」

お遍路をするつもりのしのぶは、お遍路のかっこいをしていた。

「携帯も置いていく」

としのぶは言った。連絡はしようと思つてもできないところに行つて、息子を試すつもりだつた。心配をしだしたらきりがない。しのぶは自分の道を模索していた。妻ができても息子ができるもいい大人になつても道を探している。遍路に出るのはその道を探す手がかりがないかと思つたせいもあつた。

「結界がなくなつたら寺の意味はなくなるかもしぬないと思つが」

「はい」

「それでも何か使いようがあるかもしれないと思つてな。それを考えてくるつもりだ」

「そうですか」

息子を、そして息子の仲間を信じている。

「行ってくる」

「行ってらっしゃい」

とレインが手を振つた。

レインが寺にひつこむと、ケイが腕を組んで寺の門の内側にもたれて立つていた。

「起きたんですか」

「ああ」

「どうかしたんですか」

「いや、なんか俺もひとことふたこと話したいことがあつたんだが
「しおぶさん？」今から走れば間に合いますよ」

「いや、いいんだ」

ケイはふいと歩きだす。

「もう一回寝る」

「「ほんになつたら起こしますよ」

「たのむ」

昨日夜中まで本を読んでいたのをレインは知つていて。
空には雲ひとつない快晴。何かそれが変に気になつて、レインは
ため息をついた。過剰に神経が過敏になつていて。

「とりあえず朝「ほんを作るかな」

とつぶやいた。

日常をこなしていなといつぶされてしまつ気がする。

静かな寺の中。静かな本堂。経を読む声は今日は聞こえない。台
所に立つと魚用のグリルでさんまを焼く。

イギリスにいたころは、時々日本食を食べる程度で、たいがいパ
ンにジャムだけとかの「ほん」だった。本で日本の料理を読んで、た
めしに作つてみたりもした。ここに来て、最初のうちケイが作る
料理を見よう見まねで覚えた。そのうち舌が味を覚えるようになり、
今にいたる。最近は一人でも料理を作る。レインが来る前はしおぶ
とケイが交互に料理をつくつていたようだが。

「「ほん」も焼けたしそろそろ呼ぼうかな」

独り言は癖だ。実家にはもう何年も帰つていなが、時々手紙を
書く。

時々実家にいる夢を見る。暖炉のある部屋で両親がいる夢だ。

離れの階段を上がつてすぐの部屋にいるケイを呼ぶ。

あおいはそのうち来るだろうし、たくやは今日も一番最後だろう。
日常からしおぶがいなくなつても普通にみんな生活するだろう。そ

れはたぶん、しのぶがみんなを信じていることもあるが、みんながしのぶを信じているということでもあるとレインは思つ。前置きはさておき、食事だ。

今日は炊き込みごはんに味噌汁にさんまだ。

ケイが来た。

「皿そだな」

返事する。

「はい、おかわりもありますよ

「おいしそう」

あおいが入つてくる。

さんまは生さんまが今年は安いらし。たくさん買つて冷凍した。

「たくやも一応起こしたけど」

来るかなあとあおいが言ひ。

「昇君たちが来るのは十時くらいですね」

レインが聞いた。

「うん、それくらいに来るつて言つてた」

あおいが答えながら手を合わせる。

「いただきまーす」

レインは箸もきちんと使ひ。ケイに教わつて食べてるつまに上手になつた。あおいも箸の使いかたはきれいだ。

もちろんケイもだ。

「いただきまーす」

と言いつつケイも食べ始める。

「おはようござこます」

たくやがあくびをしながら入つてきた。血圧が低いせいだひつ。

ぼうつとしている。それでもいつもよりは遅い起床なのだが。

「味噌汁ありますから、最初に塩分をとると底血圧に効くそつです

よ

レインがそつと云つ。

「やうなんだ」

言いながらたぐやは味噌汁を一口飲んだ。

ジーンズにトレーナーという格好だ。あおいも同じような格好をしている。

レインはジーンズにシャツ。

ケイは、着物だ。

仕事のない日は着物で通している。

「今日はバイト休んだ」

ケイが言いつつとなりの席を見た。狐がくるりと座布団の上で回つてよし落ちついたとでもいうようにすやすんと座った。

「こいつ割と強いぞ、レイン」

とケイが言つ。

「こいつ？」

「ああ、この狐」

ケイが戦つているとき、攻撃したこと思い出す。青い火を吐いて相手をひるませた。

レインが山に持つていけなかつたのでケイがふとこりに入れっていたのだ。

「そりなんですか」

とレインが言つ。

「頼もしいですね」

あおいが言つ。

「そうだな」

たくやがぼうっとした表情で言つ。

「道成寺」

「はい」

ふいに着物を着た大男がうつそりとケイの影から立ち上がる。

「ちょっと外見できてくれ。なんか変な感じがする」

「わかりました」

消える。

「どうしたんですか」

「いや、なんか気配がするんだ」「私は分かりませんが」

レインが言つ。

あおいが眼鏡を外した。

「あ、なんか男の人立つてる。靈っぽい」という。

「死んでるんですか」

「どつちかと生きてる人っぽいけど。私、靈って死んだ人の波長と生きている人の波長の区別がいまいちつかめてないから」という。

道成寺が現れた。

「林という男です」

「そうか。なんだ用は」

「しのぶさんに会いたいそつで」

「そうか」

ケイが立ち上がつた。

「俺がちょっと見てくる」

「はい」

レインが答える。

ケイは下駄をはいて外に出た。

「なんだ」

「しのぶさんに用があつてきました」とサラリーマン風の男が言つ。

「林さんと言つたな」

「はい」

「何の用だ。しのぶさんならしばらく留守だ」

「残念ですね」

「何が」

「私の封印をしてくれたのですが、肺がんが見つかったのであの世にあと三か月ほどでいけるんです。喜んでもらおうと思つたのに」

男は言つ。

「肺がん?」

「ええ、もう末期なんで」

そう言つとくふりと笑つた。

「封印?」

「ええまあこちらの話です。それでは身をひるがえし、男が去つていいく。

「なんだつたんだ」

ケイが首をひねりながら戻つてくる。

「どうしたんですか」

朝食の片付けをしているレインが聞く。

「いや、なんというか」

「生きた人でしたか」

あおいが聞く。

「いや、なんか三か月で亡くなるとか言つてた」

「あ。それで変だつたんだ」

あおいは人の死期もぼんやりわかる。事故死なんかは分からぬこともあるが。

「死んだ人か生きた人か区別できるといいんだけど」

あおいが言つ。

たくやが大きく伸びをした。

「あと一時間か」

「そうですね」

レインが言つ。

食卓に全員揃つている。

「しのぶさん今頃どのへんだろ?」

「電車と新幹線乗りついでいくつて言つてましたよ」

「四国まで?」

「ええ。途中で船にのるかもしれないとは言つてましたが

「なんで一体今しかも四国なんだ」

「さあ」

「案外」ないだ見てたテレビのみかんが食べたくなつたとかじゃねえだろ?」

四国のみかんの特集をテレビでやつてこたのだ。

「こくらなんでもそんな理由じゃ」

とあおいが言つて、でもたくやのお父さんだもんなど思ひ。

「じつした」

あおいが笑いを押えて微妙な表情をしてくるのいたくやが笑つべ。

「なんでもない」

と言ひ。

「なんでもないのか」

「うん」

ふつんと言つて、たくやがひとこときつねの入つてこぬ筒を持った。

「ここつて」

「ん」

「名前なこのか」

とたくやが言ひ。

「コンちゃん」

とあおいが言ひ。

唐突に名前が決まった。

「コンちゃんか」

「コンちゃんですか」

「コン……」

あおいが突然に何か言ひことがある。

「なんとなくそんな名前がいい感じがしたから」とあおいが言ひ。

「コンちゃんにつけおせましゅ」

レインが言ひ。

「やうだな」

ケイが言ひ。

「名前ついてよかつたなコン」

とたくやが言ひ。

「さて、そろそろ片付けますね」

時間が来たら中庭に集合ですね。と言ひ。

「俺はそれまで本読んでる」

ケイが言いつつ立ち上がる。

「私は宿題」

「俺も宿題」

じゃあ解散。

と言つて各自戻る。

寺にはゲーム機がない。テレビも一台だけだ。たくやは小学校の頃はゲームがやってみたいとしのぶに「ねた」ともあるが、金がないといふひとことで終わつた。

中学になつても塾に行かないたくやは勉強が遅れている。学校の勉強と補習だけで成績を維持しているあおいに多少コンプレックスがあるのも事実だ。

「宿題、見ようか」

「助かる」

たくやはそれでも少しずつ勉強している。高校は行きたいと思っているからだ。

成績は悪いが、頭は悪くないというのが担任の先生からの言葉だつた。なんとか私立の高校に進学したいといつたくやに、しのぶもそうかと言つてくれた。つい先日の話だ。

公立高校は無理。だと判断した。たくやの住んでいる地区では公立高校のほうがレベルが高い。

「あおい」

「ん」

「なんでこの英語の発音がこうなるか分からない」

「ああ、これはもう覚えるしかなによ。呪文と同じ」

「呪文があ。意味分かってなくても使えるもんなあ。俺、もし大学行けるようなことになつたら呪文の意味がわかるような学科に進学してみたいな」

「がんばってみたら

「そうだなあ

たくやが自信なくうなづく。

「たくや、もっと勉強できるようになると思つよ。厳しい修行も耐えてるし、もの覚えも悪くな」

「そうか?」

「うん」

だつて。この前の宿題からだいぶ進歩してる。とあおいが囁く。
「言われたとおりにノート作るようにしてるけどな」

「うん」

「なんとかレッスン5までは覚えた」

「たくや覚えるの早いもん、私は普通にしか覚えられないから、何度も書くけど」

とあおいが囁く。

「覚えるのは割と快感なんだよな」

たくやが囁く。

「今まで忙しくてなかなか勉強できなかつたから」

「そうだね」

「数学の公式とかも丸覚えならできることさだ」

「うん」

「今からでも間に合ひつか?」

「たくや次第だよ」

あおいが言った。

そんなことをしている間に十時になつた。

「こんにちは」

舞の声がした。

「はーい」

レインが出る。

「おまちしてました

「これで全員揃つた?」

疲弊していく、授業中も寝てばかりいた昇が、元気よく言つ。

「若いなあ」

ケイがそう言つた。

「ケイ」

「なんだ」

「そうだつたな」

「あなたと比べたら大概の人間は若いです」

レインに言われてケイは答える。

ケイの肉体が、人間と同じように劣化していく身体に変わったのは数年前だ。18のときからずっと止まっていた時間が動きだしたのだを感じる。鍛えてはいるが、着実に衰えていく身体。それでも、レインと同じ時を過ごしたいと願つた時からケイは変わったのだ。

「さあ、行くぞ」

ケイが言う。

本堂の裏に向かった。

ちょうど本堂の裏手は板が張り巡らされていて、誰も入れないようになつている。

ケイがその板の一枚をはがした。道成寺も手伝つ。祠がふたつあつた。

「結界が張り巡らされているな」

痛いほどの静けさがあたりを包んでいる。

「まずは一番最初の結界をはずします」

レインが告げると手を前に出した。

光が手からほとばしる。ざわりと風が動いた。

「うわ

昇が声を上げる。

ぐわ。と、腹の出た餓鬼が何人もこちらに来て消えた。

あおいが眼鏡を外したのだ。

それで昇天したものが何人かい。

「あおいつてやつぱすげえな」

たくやが脱力しつつ言つ。呪文の用意もしていたのだが。「鬼に殺されたあと食われたものの魂だ」と、ケイが言つ。

「なぜ知ってるんです」「

レインが言つ。

「俺は食べたことはないぞ」

ケイは言つ。

「私もありません」

道成寺が言つた。

「里で食べた奴がいたがな」

ケイがそう言うと腕をまわした。

「何にせよ氣持のいいもんじゃない。食ひりつひとでのエネルギーを自分のものにできるというがな」

と言つた。

「次の結界はもう壊れてきていますから、十分氣をつけて」
舞さんには結界を張ります。とレインが言つ。

「お願ひします」

と舞が言つた。舞の能力は、結界の中にはあっても使える。どうも、違つことわりの中にある能力らしいとはケイの言葉だったが。

「うつと音をたてて風が一陣吹いた。来る。と身構える。レインは札を出して寺より外にこの瘴気が出ていかないように結界を張つた。

「レイン、あまり無理はするな

「はい」

ケイが声をかける。レインはこのところ徹夜続行で札を書いていた。日常もきちんとこなしながらである。

「壊れきつたな」

「ごわああああ。と声が響いた。

「俺の眠りを覚ましたのは誰だ」

頭のなかに直接響いてきた声。

それぞれにも聞こえたようだ。

黒い霧のようなものがあたりに立ちこめ、腐臭が空気を満たす。

黒い鬼が立っていた。

髪のない頭、額から出たつの、牙のある口。眼はえぐられたようになくて奥からきらきらと光が見える。

「怖い」

舞がそう呟く。

「大丈夫、舞ちゃん」

昇がそう言つ。

「うん」

舞がそれに応える。

まずは鬼のほつの結界をあけたようだ。

「浄化」

たくやが呪文を発動させる。

空気が透明になる。

鬼が叫んだ。ぐおおおおおお。と人の声はしていない。獣の遠吠

えのようだつた。

あおいが矛をかまえた。一撃。

「ぐああああ」

鬼が叫ぶ。黒い血が噴き出た。あおいはそれを避けて矛を抜いて後ろに下がる。

昇が矢を射る。矢継ぎ早に四本。鬼の腹にささつた矢をまとめて鬼が抜き取る。

ぐああああああ。

また叫んだ。

鬼は動きだすと、隣の結界を引きちぎる。

「高子」

と頭の中で声がした。

「どいだ」

そこか。と頭に響く。

「しまつた」

ケイが叫ぶ。

今度は赤い風が巻き上がった。

女が十一単で立っていた。こちらを向いた。頭にはつくづくと口があいている。

「どんな妖怪だつたか全く知らなかつたが」

「ふた口女」

昇が言う。

「あの妖怪は江戸時代くらいの妖怪じゃないのか」

ケイが言いつつ身構える。

「わらわはお前など知らぬ

「高子」

舞が叫ぶ。

「気をつけて、その女の人が、人を何人も食べてる。女が連れ込んだ男を鬼が殺してそれを食べてた」

そこまで見えたようだ。

二人が互いを見る。

鬼はぼたぼたと血を流しながら女の片腕をつかんだ。

妖怪の女は、ゆっくりと手を前に出した。

「急いで離れて」

舞が叫ぶ。

つかまれていない方の手。女の爪がにゅうと伸びると鬼の手を引つ掻ききつた。

「高子おおおお」

鬼が泣き叫ぶ。

「知らぬ」

「浄化」

たくやが小さく唱えていた呪文を発動させる。赤い霧が消える。
女が振り返り、たくやのほうに向かつて手を伸ばした。爪が長く
伸び、たくやの腕に突き刺さる。

「たくや」

「大丈夫だ」

抜き取ると、女はにたりと笑った。たくやを次の餌に選んだよう
だ。

「たくや下がつて」

あおいが立ちふさがると、髪の毛がずるつとのびてあおいの手に
巻きついた。

「あおい」

たくやが叫ぶ。

昇が弓を引き、女に一本命中させる。
ぐあ、と女は言つが、ぐつとつかんで矢を抜き取る。
する。とあおいが引きずられていく。

「あおい」

たくやが叫ぶ。

あおいがメガネをはずし、胸のポケットに入れた。あおいから光
がほとばしる。自分の靈力を最大に流したのだ。

「ぎやああ」

女が目を閉じて後ろに下がる。あおいにからまつていた髪がほど
ける。

あおいが矛を持ち直して、女を刺した。

ケイが鬼の方に走り、道成寺が鬼を捕まえた。ケイが殴る。

レインが舞のところまで下がる。

「舞さん」

「はい」

「他になにかわかりますか」

「今、読んでいます」

舞が言つ。眼を閉じると、息を吐き、また吸う。

「見えました」

舞が言い田をあけた。

「その昔にこの男は鬼ではなかつた」

舞がそう高らかに告げる。

「女もこんな姿ではなかつた」

人間だつたころに出会つたならもつと幸せになれる結果もあつたかも知れないけど、すでに妖怪になつていた女を男が気に入り、女は男が嫌いだつたが、女は人を食べるようになつていて、人間の男の肉を欲しがり男は女の求めるまま人を殺し続けた。
「そして男は鬼になつた」

と舞が言つ。

「女が妖怪になつたのは、好きだつた男を食べたときです」

「おいしかつたわ」

と突如女が言いだした。

「あの人はおいしかつたのよ」

「盗賊に襲われて夫を殺されて、何もなくてひもじくて食べた」

舞が言つ。

「かわいそう」

と舞が言つ。

「私たちでは分からぬ。食べるものがなくてひもじいなんてことは」

言葉では何とでも言える。でもきれいごとではなかつたのだ。

「食べたことが引き金になつて女は妖怪になつた」

そしてその女を氣に入つた男も他の男を食べたがる女に食べさせる男を殺し続けて鬼になつた。舞がそう言つ。

「封印をしたのは旅の僧」

と呴いて、舞がかくんと崩れる。レインが舞の周りに張つていた

結界をといて舞にかけよる。もつ一度結界を張り直す。

「大丈夫ですか」

レインが言ひ。

「旅の僧は唐にもわたつたことのある僧から封印の仕方を習つてい
た。それが、たくやくんの先祖」

ぐつたりしながら舞は滔々としゃべつていく。私たちはかつて封
印した者たちの意思を継いでいる。と言いながら目を閉じた。
昇が心配そうにそちらを見るが、今は敵が先と、弓を引いた。

やがて二つの敵は動かなくなつた。

「淨化」

とたくやが言ひ。

光が包み込む。あおいが眼鏡をかけた。
消えていく。

「これでよかつたんだろうか

たくやがつぶやく。

「私たちでは分からない」

とあおいが言ひ。レインが辺りに塩をまき、きれいにする。

「舞ちゃん」

昇がレインと舞のいるところまで走る。

「大丈夫」

静かになつた寺の本堂の裏から出て、全員がほつと胸をなでおろ
した。

第五部（後書き）

「いいよ」と、やがて、おじいちゃんが、うなづいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5210v/>

あおいと仲間たち

2011年8月6日03時31分発行